

コロナ禍のオンライン授業をメディア実践する

——伝え学び合う場をつなぐ——

西 川 麦 子

辻 野 理 花

はじめに

この論文は、2020年度前期の Web を活用した授業への取り組みをひとつの「メディア実践」として捉え、試行錯誤のプロセスを記録し、そこから見えてきた「コミュニケーションの問題」を考察しようとするものである。

グローバルなパンデミックが予期せぬ速さで拡大するなかで、甲南大学では、2020年2月19日に「甲南学園新型コロナウイルス対策本部」が設置され、大学 Web サイトや学生向けポータルサイト「My KONAN」を通して新型コロナウイルス感染症（COVID-19）に関する情報を随時に発信した。3月16日には、「2020年度新学期授業対策会議」が設置され、「教育・研究を止めない」という方針のもとで、Web を活用した授業の実施に向けての準備が早急に進められた¹⁾。「学習支援システム」(LMS: Learning Management System) の多様な機能の活用法や教材作りについて学内向けの FD 講習会が、3月末から随時に開催された。

4月7日には、兵庫県・大阪府等に緊急事態宣言が発出された。翌日には、甲南大学は、学生のキャンパス内への立ち入りを原則、禁止した。4月16日には、緊急事態宣言の対象が全国に拡大された。新学期の授業は、予定より2週間遅らせ、4月20日に全ての授業がオンラインで開始された。

緊急事態のなかで、Web を活用した授業を実施するための大学側の準備は迅速に行われた。しかし、学生、教職員それぞれが使用するインターネット環境やパソコンをはじめとした機器、それらを使いこなすスキルの習得程度は、一様ではない。また、専門領域や授業の内容、方法は科目によって異なる。甲南大学文学部社会科学部²⁾（以下、社会科学部と記す）の専門科目のなかで、多様な媒体を用いて伝えて学ぶ「メディア実践系科目」の授業の作り方については、本論文で扱う2科目を含め、科目担当者間での情報交換と共同研

究を進め、その成果を発表してきた（西川 2018, 松川・辻野・西川 2018）。これまで対面授業を前提としてきた授業法がオンライン授業においてどのように活かされたのか。本稿では、社会科学部専門科目の「メディア文化論」と「発展研究 F（メディアコミュニケーションと表現 I）」を事例としてとりあげ、2020年度前期の4ヶ月間の授業プロセスを詳しく追いながら検討していく。

本論文の筆者の西川と辻野は、ともに文化人類学を専門として、それぞれアメリカと日本の地域メディアの活動に番組制作スタッフとして携わっている。西川は、アメリカ、イリノイ州にある Urbana Champaign Independent Media Center (UCIMC) が運営するコミュニティラジオ局 WRFU (Radio Free Urbana) の日本語番組「Harukana Show」(HS) を担当し、日米をオンラインでつないでゲストを迎える1時間のトーク番組を毎週、制作している。辻野は、甲南大学がある神戸市東灘区に拠点を置く「特定非営利活動法人ひがしなだコミュニティメディア」(HCM) のインターネット放送局「MEDIA ROCCO」の組織運営と動画配信番組「ほっとタイムこうべ」のライブ配信に関わっている。WRFU も MEDIA ROCCO も、2020年3月には、COVID-19 感染拡大防止対策のために関係者がスタジオに集まることができず、これまでの対面的な共同作業からオンラインを活用した番組制作へと切り替えざるをえなかった。筆者たちは、コロナ禍における協働のあり方や多様な情報媒体の利用法をそれぞれの地域メディアの現場から改めて学ぶことになり、その経験を授業の内容や方法にも活かしてきた。本稿では、非常事態における教育現場を、地域や社会とのつながり、連携という視点を入れてとらえていく。

なお、共著者のうち西川は甲南大学文学部社会科学部専任教員、辻野は関西の複数の大学で文化人類学やメディア・映像関連の授業を担当している非常勤教員である。オンライン授業とはいっても、大学によって、インターネット環境も学習支援システムも、利用でき

る設備や機材,そして感染症拡大防止対策も授業方針,学生支援のあり方も異なる。対面授業からオンライン授業へと移行するなかで直面した問題のひとつは,関係者間の情報伝達や,異なる科目間の情報共有の難しさである。立場が異なる筆者たちが一つの論文を執筆することによって,こうした問題も見えてくると考えた。

1で扱う「メディア文化論」(西川・辻野・松本担当,2年次配当,2020年度履修者188人)は,社会学科の専門科目であるが,文学部の「地域連携講座科目」として他の4学科³⁾からも履修することができる。コミュニティメディアなど多様なメディアの「現場」からの視点と方法を学ぶ講義科目である。オンライン授業において,どのようにすれば複数の教員によるリレー式授業を1つの科目としてつなぎ,顔が見えない多人数の受講者がともに授業に参加しているという感覚と学びの「手応え」を生み出すことができるだろうか。2「発展研究F(メディアコミュニケーションと表現I)」(辻野担当,3年次配当,履修者10人)は,本来であれば,大学の設備と機器を利用して行う映像制作の実習科目である。これまでは,神戸市東灘区を中心として共通のテーマのもとで各グループが地域を取材して映像を制作してきた。コロナ禍において大学の設備や機材を使えず,グループワークも困難ななか,受講生たちはWebを活用してどのように映像制作のプロセスを学び,実際に作品を制作し上映会を実施し,そこで何を見出したのか。3では,1と2で扱った授業例と筆者たちが関わる教育と地域メディアの現場の経験をもとに,3つの問題を考察していく。第1に,緊急事態の教育現場におけるピアラーニング,第2に,授業の参加者のコミュニケーションを活性化させる仕掛け,第3に,授業参加者が身近な暮らしやそこでの関係を意識して見つめる内省的アプローチ,である。

西川が,「はじめに」,および1と3を,辻野が2を分担執筆し,全体を西川と辻野が読み合わせたうえで加筆修正した。

1「メディア文化論」(講義科目):授業関係者と地域メディアとの連携と協働

1-1 授業目的と形式,受講者

多様なメディアの「現場」から考える

甲南大学社会学科の「メディア文化論」は,マスメディアとは立場や情報伝達の方法を異にする「オルタナティブメディア」を扱い,なかでも地域に拠点をお

くコミュニティメディアに焦点を当てている。情報の受け手にとどまるのではなく,一人ひとりが,自分が居るその場所から表現・発信し,人と情報をグローバルにつながり可能性を考えることを目的としている。「メディア文化論」はまた,文学部の「地域連携講座科目」でもあり,社会学科以外の学生も履修することができる。より多くの学生が地域に関心を持ち,さまざまな現場と社会との関係をとらえて自他を見つめ直すという趣旨である。

2014年度から2019年度までは「メディア文化論」を西川と辻野が共同担当し,メディア実践(動画番組,ラジオ番組の制作・配信)に重点を置いてきた⁴⁾。しかし,コミュニティメディアについての「概論」と「実習」の両方をそれぞれじっくり学ぶことができるように,2020年度からは,「メディア文化論」(前期,2年次配当,コミュニティメディアについての講義)と「発展研究F(メディアコミュニケーションと表現II)」(後期,3年次配当,グループワークによる番組制作の実習)という2つの科目に分けることにした。また,「メディア文化論」は,前年度まで実習系科目として履修者数を50人以下に限定していたが,講義科目となった今年度からは人数制限を外したため,履修者が188人(社会学科116人,他学科72人,2年生85人,3年生78人,4年生以上25人)という多人数となり,専門も学年も異なる学生が受講することになった。

複数の講師によるリレー式講義と公開講座

「メディア文化論」を再編するにあたり,多様なメディアの「現場」について学ぶことができるように,日本や海外で映像制作,動画番組制作・配信,ラジオ番組制作などに携わっている複数の教員がリレー式で講義を担当することにした。西川と辻野の他に,2020年度は松本章伸氏(日本学術振興会特別研究員)に講師を依頼した。松本は,『情熱大陸』や『NHKスペシャル』等の日本のテレビ番組をはじめ,NHK国際放送やディスカバリーチャンネル等海外へ情報を発信する番組を手がける一方で,関西の大学で映像理論や実践を行う講義や,行政と連携し,市民・学生と一緒に地域プロモーション映像の制作講座も担当し,映像メディアの活用方法を模索している(松本2017a,2017b,2020)。2020年度「メディア文化論」では,辻野が第1部「コミュニティメディア:日本編」を,西川が第2部「誰でもメディアになれる?アメリカ編」,松本が第3部「多様な影響を受けて生み出されるメディアを理解する」を担当した。また,文学部の「地

図表 1-1 2020年度「メディア文化論」授業日程

| 回 | 月日 | 曜日 | 担当 | 授業形態 | 授業内容 | 地域メディアとの連携 |
|----|------|----|----|--------|---|----------------|
| 1 | 4/21 | 火 | 全員 | オンデマンド | オリエンテーション、講師紹介 | |
| 2 | 4/28 | 火 | 辻野 | オンデマンド | 1-1 日本のコミュニティメディアについて知ろう | HS No. 476-1 |
| 3 | 5/12 | 火 | 辻野 | オンデマンド | 1-2 ソーシャルメディアを活用したコミュニティメディア（HCM） | HS No. 477-2 |
| 4 | 5/19 | 火 | 辻野 | オンデマンド | 1-3 コミュニティメディアの可能性、参加するメディア | |
| 5 | 5/23 | 土 | 辻野 | オンデマンド | 1-4 つなげるメディアー地域と連携したニューカマーのこどもの学習支援でメディアを活用する | |
| 6 | 5/26 | 火 | 西川 | オンデマンド | 2-1 北米のアクセス権、市民メディア、誰でもメディアになれる？（HS, WRFU） | |
| 7 | 6/2 | 火 | 西川 | オンデマンド | 2-2 「ニュース砂漠」と多様なメディアの連携 | |
| 8 | 6/9 | 火 | 西川 | オンデマンド | 2-3 コミュニティメディア：「関係」をつなぐ、『The Orange Story』 | HS No. 480 |
| 9 | 6/16 | 火 | 塩崎 | リアルタイム | ウェビナー（一般公開）「映像制作と地域社会」（西川・辻野・松本参加） *HCM 技術協力 | MEDIA ROCCO 配信 |
| 10 | 6/23 | 火 | 松本 | オンデマンド | 3-1 映像は“つくられる”：映像分析とテロップ制作に挑戦 | HS No. 482 |
| 11 | 6/27 | 土 | 松本 | オンデマンド | 3-2 日本のテレビドキュメンタリーは「占領期」に生まれた？ | |
| 12 | 6/30 | 火 | 松本 | オンデマンド | 3-3 様々な“境”を越えるデジタルメディアの出現（VICE Media） | |
| 13 | 7/7 | 火 | 松本 | オンデマンド | 3-4 あなたがニュースキャスター：ニュース原稿制作に挑戦 | |
| 14 | 7/14 | 火 | 全員 | オンデマンド | 最終課題、レポート作成（番組企画作成） | |
| 15 | 7/21 | 火 | 全員 | オンデマンド | 総評（動画） | |

「HS」：Harukana Show（表内数字は Podcast No.），WRFU, US, 「HCM」：ひがしなだコミュニティメディア

域連携講座科目」として、全15回の授業のうち1回は、ゲストスピーカーを招聘する「公開講座」を開催することになっていた。2020年度は、奈良県を中心に映像制作を展開している映画監督の塩崎祥平氏に講師を依頼した。

授業計画においては、西川が、辻野や松本が担当する第1部と第3部の講義に参加し、15回の授業をつなぎ、下記のような方法で各回の授業を補助するつもりであった。辻野が担当する第1部の4回の授業を聴講し、実際の講義内容や学生の反応を受けて、西川が担当する第2部の講義内容、方法を調整し、第3部を担当する松本にこれまでの授業回の内容を伝える。また、一般的な講義形式だけでなく、講師たちの対談を入れることで、互いの活動の特色を引き出し学生に伝える。グループワークをする際にも、スチューデント・アシスタント（SA, 学部生）やティーチング・アシスタント（TA, 大学院生）の他に、もう一人の教員が補助に入ると、受講者数が多いクラスでも様々な実習が可能であることを、社会学科のいくつかの授業においても経験してきた。公開講座においても、ゲストスピーカーの話を聞くだけでなく、受講者がトークに参加しやすい工夫ができればと考えていた。

1-2 授業構成と方法：担当講師間のピラーニング

2020年度前期は、4月20日からの開始時点では、最初の2週間は対面授業を行わず Web を活用した授業としていたが、大型連休明けに、6月5日までオンライン授業を継続し、その後の状況をみるという方針となった。前期全体を通した授業方法の方針が定まらな

い段階で、非常勤講師に対面とオンライン授業のどちらにも対応できる準備をお願いせざるをえず、6月中旬に予定していた「公開講座」の方法についても決めることができず、苦慮した。兵庫県に対する「緊急事態宣言」は、5月21日には解除されたが、甲南大学ではその後も、前期の最後まで、原則として Web 授業を継続することになった。

「メディア文化論」の15回の授業は、最終的には図表 1-1 のようなスケジュールで実施された。辻野・西川・松本が講義で扱う内容は異なるが、授業形態は、いずれもオンデマンド方式である。毎週火曜日の零時に、その週の授業資料が My KONAN から公開され、同じ週の木曜日中に課題を Web 提出する。受講生は、オンライン上、あるいはダウンロードして授業資料を読み、音声や映像を視聴したうえで、課題に取り組む。各回の課題の内容は異なるが、300字から1000字程度をサイトに直接に書き込む。提出者全員の課題内容を一覧として一括ダウンロードできるので、全体の傾向を一目で把握することができる。また、My KONAN にアップされた各回の授業資料や提出された課題は、共同担当の教員が「参照を許可する」「編集を許可する」という設定にすると、お互いの授業を事前・事後に参照し、また、自分が担当していない授業回の学生の反応も知ることができた。My KONAN が、教員と学生間だけでなく、同じ科目の担当者間の情報交換や授業方法を学び合うツールにもなった。

「メディア文化論」第1部を担当した辻野は、パワーポイント⁵⁾のスライドに図表や地図、写真を掲載し、文章で説明を加え、これを PDF にした。受講生

各自が、それぞれの場所から利用できるインターネット環境やデバイスも様々で、突然のオンライン授業に対応しにくい場合もある。資料はできるだけ容量を減らし負担がないようにした。また、「読むスライド」に MEDIA ROCCO の番組アーカイブのリンクを貼れば、コミュニティメディアの活動の事例として番組の動画を見ることができる。授業回によっては、内容に関連する論文を添えた。

第2部を担当した西川は、学生からの意見を参考にしながら、パワーポイントのスライド、音声、番組アーカイブ、文献や新聞記事や動画など、提示する資料の種類と組み合わせ方を授業回ごとに変えた。My KONAN の当該科目の課題提出の「コメント」欄には、「資料が多いと、異なるファイルを開く必要があり、煩雑だ」「他の授業のようにそれぞれのスライドに音声をつけてまとめたほうが良い」「1枚のスライドの音声が高すぎる」「授業資料をすみずみまで読み課題をすると4時間もかかり、過酷である」というアドバイス、励まし、苦情が届いた。学生たちは、1週間に多数の科目を受講し、講師よりも多様なオンライン授業を経験しているので、彼らからの率直な意見は貴重であった。

第3部を担当した松本は、アメリカの大学に留学していた時に受講したオンライン授業を参考にして、文字と映像と音声を組み合わせた Google Slides を作成、URL のリンクを貼り資料を提示していた。1枚のスライドの情報量が多すぎず、かつ印象的な見出しでポイントを明確にし、また音声、映像の長さを数分内に収めている。スライドを手動で進めることで、閲覧者が自分のテンポで、立ち止まりながら、かつ、例えば、短い動画を見ながら受講生各自がその字幕スーパーを考えるなど、アクティブ・ラーニングも取り入れていた。知識を伝えるだけでなく、学生が興味をもってスライドを読み進めることができる仕掛けが埋め込まれていた。

毎回、学生たちがオンライン上に掲載された授業コンテンツに取り組み、課題を提出することで授業は成立する。しかし、対面授業のように、受講生の反応を含む授業の空気感は、受講生にも教員にもなかなか伝わらない。また、専門や活動の場や、そこでの立場も異なる複数の講師が1つの科目を担当する面白さをどのように引き出すことができるか。そして、どのようにして多数の受講生の声を受け取り、それを授業に反映し、参加者間の対話を生み出すことができるのか、という問題に西川は、科目代表者（つなぎ役）として

取り組まねばならなかった。

1-3 講義をライブにつなぐ、地域メディアとの連携「地域メディア」でつなぐ

「メディア文化論」第1部では、日本のコミュニティメディアについて扱い、住民参加型の地域メディアの可能性を考えるため、甲南大学と同じ街にある HCM の活動のなかで、インターネット放送局 MEDIA ROCCO を事例として紹介することになっていた。授業開始が2週間延期されたとはいえ、急遽のオンライン授業の準備をする時間は限られている。コロナ禍において、地域メディアの現場が直面している問題への取り組み方こそが、この授業がテーマとして扱う「住民主体の地域メディア」の特質を表している。しかし、進行形の問題を整理してすぐに授業のなかで伝えることはなかなか難しい。

MEDIA ROCCO は開局以来、地域にスタジオを借りて、土曜日の午前に関係者が集まり、時には地域の異なる場所からの中継も交えた生放送の定期配信を8年間、続けてきた。しかし、2020年3月からは、番組制作の拠点となるスタジオに住民が集まることができなくなった。HCM は、これまでもソーシャルメディアを活用して番組制作や地域イベントを開催してきたが、活動の基盤は、地域における対面的な関係である。コロナ禍において、オンラインを活用しながら、地域メディアとしての活動をこの先、どのように展開できるだろうか、という問題に直面していた。

一方、西川が関わるアメリカのコミュニティラジオ局の活動においても、同様の困難や不安を抱えていた。イリノイ州では3月20日に州知事より「自宅滞在命令」(Stay at Home Order) が出され、WRFU がある建物も閉鎖された。定例集会も対面ではなく Zoom Meeting に切り替えられた。ラジオ局スタジオという物理的な場所を介さず、今後、どのようにしてラジオ番組を制作・放送・配信するのかを緊急に議論しなければならなかった。結論としては、それぞれの番組担当者が利用可能な機材を用いて、各自のネット環境のもとで、「工夫」をして番組を事前収録し、WRFU スタッフに送り、これをオンライン上の操作で音源を送信機に送り放送・配信することになった⁶⁾。

Harukana Show は、日米をオンラインでつなぎ毎週ゲストを迎えるトーク番組であるが、2020年3月以降は、さまざまな出演者がそれぞれの場所からコロナ禍における暮らしや仕事や活動について自由に話し、COVID-19 が世界の異なる場所をつなぎひとつのキー

ワードとなっていた。パンデミックのグローバルな感染拡大において、日本の地域メディアはどのように対応しているのかについて、コロナ禍における MEDIA ROCCO の活動をひとつの事例としてアメリカのコミュニティラジオ番組で伝えることは興味深い。そこで西川は、辻野に Harukana Show への出演を依頼した。そうすれば、「メディア文化論」の受講生が、辻野のラジオトークを HS 番組サイトのアーカイブから聴くこともできる。こうして、5月6日に、Harukana Show のもう一人のホストの小牧龍太氏と西川と辻野との1時間あまりのトークを収録し、WRFU から5月8日と15日の2回に分けて放送・配信した。辻野は、MEDIA ROCCO の新しい番組制作、配信方法を、「誰でも参加できる多地点ライブ配信」と呼んだ。出演者がスタジオに集まるのではなく、全員離れた場所からビデオ会議システムに入る配信方法について口頭で説明するとともに、Harukana Show のアーカイブに詳しい解説文を寄せた⁷⁾。

アメリカのラジオ局から配信される日本語番組での、辻野と西川の関西弁トークは、授業のレクチャーとは異なる味わいがあり、シナリオのない対話が展開していくライブな面白さがあった。第4回メディア文化論(5月19日)の授業資料のなかで辻野は、「現在、新型コロナウイルスの影響は世界各地に及んでいます。コミュニティメディアも例外ではありません。こうした影響下で、HCM はメディア活動をどう継続してきたのか? どのような変化を迫られたのか?」と受講生に問いかけ、「1. 新型コロナウイルスの影響下でのメディア活動の変化」と「2. 住民が参加するメディア」について、授業資料として HS アーカイブのリンクを貼った。こうして、「メディア文化論」第1部で、辻野がコロナ禍における HCM の活動について述べ、また、受講生が HS アーカイブへアクセスすることで、第2部で扱う米国のコミュニティラジオ局の話題へつなぐ予習にもなった。

「フィルムメーカー (NPO) 製作の映画」でつなぐ

「メディア文化論」第2部は西川が担当し、1970年代の市民運動の中で獲得した北米の「アクセス権」の考え方や、米国の「パブリックアクセス・チャンネル」制度の展開について概説した。また、トランプ大統領政権下で商業メディアにおける自由競争と大手企業による寡占が進行し、パンデミックがさらなる打撃を与え、地方の多くの商業メディアの運営が困難に陥っている状況を、2020年の新聞などの報道から紹介

した。そこで、地域に拠点を置く非商業的な住民参加型メディア活動の重要性が増していることを指摘し、WRFU が含まれている UCIMC の活動を事例として紹介した。UCIMC を拠点としたアートやメディア活動においては、人々は、コミュニティラジオや Public TV、地方の商業テレビや新聞、SNS、Web サイトなど、多様なメディアを積極的に組み合わせて利用している。しかし、メディアが人をつなぐのではなく、メディアを使って人が人をつなぐ。この点を、授業では伝えたいと考えていた。

第2部で扱う教材の1つとして西川は、Erika Street 監督『The Orange Story』(2016)を紹介した。第2次世界大戦中のアメリカでの日本人、日系アメリカ人の強制収容に関する短編映画である。シカゴに拠点を置く FULL SPECTRUM FEATURES (FSF) が製作した。この NPO のフィルムメーカーのディレクターを務める Jason Matsumoto 氏は、シカゴ郊外に育った日系アメリカ人4世であり、「法悦太鼓」というグループを率いる太鼓奏者でもある。2019年9月、イリノイ大学の Japan House が主催する Matsuri に Matsumoto が参加した際に、現地にいた西川が演奏後の Matsumoto に話を聞いた。この取材を、10月に2回に分けて Harukana Show で放送した⁸⁾。メディア文化論の授業では、草の根メディアのネットワーク形成について示す事例として、西川が Matsumoto を取材するに至る経緯を説明した。そして、受講生各自が『The Orange Story』をオンラインで観た感想を授業課題として提出した。そこには、「メディア文化論」第3部の授業へとつなぐ次のようないくつかの意図もあった。

『The Orange Story』はセリフも字幕も英語である。そこで、HS スタッフの小牧が申し出て、FSF から英語の字幕原稿を受け取り日本語に翻訳し、また画面に映し出される当時の新聞記事やポスターの英語なども、適宜日本語に訳出した⁹⁾。授業では、小牧による日本語翻訳の PDF を資料として受講生に提示した。英語を不得手とする者も「翻訳」資料によって映像を理解しやすくなり、また「字幕」の存在を少しでも意識することになる。松本が担当する授業の初回のテーマ、「映像は“つくられる”：テロップ制作と映像分析に挑戦」にも話題として移行しやすい。また、この映画は、第2次世界大戦時の米国での日系人強制収容の歴史に触れることで、第11回講義「日本のテレビドキュメンタリーは『占領期』に生まれた?」の話題にも時代背景として関連する。

この映画をプロデュースした FSF は、これまで映

像制作から排除される傾向にあった女性, LGBTQ, 人種差別を受けてきたマイノリティに制作への道を開き, 多様な作品を生み出し教育活動を展開することを目的としている。こうした従来の商業ベースとは異なる市民による映画制作, 上映活動が存在し, 小牧が日本語字幕の翻訳を申し出たような様々な形での連携が可能であることを伝えたいと考えた。これは, 第12回の講義「米国・新興メディアが描く『共生』の物語～VICE Mediaを事例として～」とも関連する。

Matsumoto は, Harukana Show のラジオトークのなかで、『The Orange Story』についてこう述べている。「第2次世界大戦中の日系人収容にみられる人種差別を繰り返さないためにも, 日系人とは限らず, 多くのアメリカ人にこうした歴史を知ってほしい。対象を変えて人種差別は繰り返されうることを, 今こそ, 歴史から学ぶことが必要だと思います」¹⁰⁾。受講生は, この映画だけでなく, HS アーカイブから, 日系アメリカ人の Matsumoto の生い立ち, 太鼓奏者としての活動, そして, この映画に込めた思いに触れることができた。2016年に制作された『The Orange Story』を, 2020年6月の日本での授業を通して観た受講生たちは, 5月25日にアメリカのミネソタ州で一人の黒人が警察官により拘束され死亡した事件に思いを馳せ, 人種差別に対する抗議運動についての感想を記していた。受講生のコメントを読みながら, 70年以上前の「過去」を描いた映画が, 観る者の意識の中で「現代」の問題へとリンクしていく様子が伝わってきた。

1-4 公開ウェビナー開催一対面的関係とオンラインをつなぐ

教職員のつながり, 地域メディアからのサポート

2020年度「メディア文化論」の公開講座は, 「映像制作と地域社会」と題し, 一般にも公開されるオンラインセミナーとなった。「メディア文化論」担当者たちがオンライン上で一堂に会し, 映画監督の塩崎祥平氏を迎えるライブトークショー形式である。

塩崎監督を西川に紹介したのは, 甲南大学職員木下朋和氏である。2019年7月に塩崎祥平監督『かぞくわり』(2019)が, 神戸市内にある「元町映画館」で上映されることを, 木下が西川にメールで知らせてくれた。木下は, 産学官民連携に関わるプロジェクトの活動を通じて塩崎と知り合った。2018年に西川は, セミナールの活動として, 学生たちがホストとなって元町映画館スタッフをゲストに招いてラジオ番組を制作し, WRFU から放送・配信したことがあった¹¹⁾。この時の

様子をレポートした甲南大学ホームページの記事¹²⁾を見ていた木下が, 映像制作と地域との関係に興味をもつ学生がいるのではないかと考え, 塩崎監督の活動を西川に知らせた。大学職員が地域にもつネットワークのおかげで¹³⁾, 西川は塩崎監督と知り合い, 「メディア文化論」の講師を依頼し, 快諾を得ることができたのであった。

依頼した当初は塩崎監督が教室に来て講演する予定であったが, 最終的には, 「公開講座」をオンラインで開催することになった。「メディア文化論」においては, 初めてのウェビナー(Webinar)である。そこで, 辻野を通してHCMに技術協力をお願いした。1-3で述べたように, MEDIA ROCCOではコロナ禍において「多地点ライブ配信」によって番組を制作しライブ配信してきた。同じ方法で, 塩崎監督をゲストに招いた公開講座を, 異なる地点にいる出演者をオンラインでつなぎYouTubeで配信する。受講生にとっては, 視聴者として参加しながら「地域メディア」の実践をリアルタイムで学ぶことになる。HCMからは機材等の利用とウェビナーの多地点ライブ配信への全面的な協力を得られることになった。

塩崎監督には, 「公開講座」に先立って, Harukana Showにも出演をお願いした。塩崎は, 日本の高校を卒業後, アメリカの大学に留学し「映画学」を学んだ。Harukana Showのトークでは, 塩崎が高校時代にどのように映画に興味を持ち, なぜ渡米したのか, といったパーソナルな語りから始まる。アメリカの大学においての, 専門分野としての「映画学」の存在と充実したカリキュラム, 留学生としての「マイノリティ体験」, 日本映画製作が東京に一極集中している問題についても話が及んだ。2020年5月21日にトークを収録し, ラジオ番組は6月5日に放送・配信された¹⁴⁾。

受講生は, HS アーカイブから塩崎監督によるトークの音源を聞き, 感想と質問を授業課題として提出した。「声」には, 話者の「人柄」が凝縮される。また塩崎の映画に対するこだわりに触れることで, 公開講座においてゲストスピーカーの話を聞く準備にもなる。受講生からの Harukana Show のトークへのコメントは, 個人情報とは削除して内容をまとめ, 塩崎に送った。今回のウェビナーでは, 話者からは多数いる視聴者の姿は見えない。この点は, 教室での対面授業との大きな違いである。塩崎に, 受講生からの質問や意見を伝えることによって, ウェビナーではわかりにくい視聴者の存在を少しでも想像することができればと考えた。

甲南大学の公開講座として「甲南大学地域連携セン



図表 1-2 「メディア文化論」 Webinar

ター」(KOREC)のWebサイトよりウェビナー開催の情報を告知した。またポスターを作成し、KORECや文学部が学内に掲示した。学生の構内への立ち入りは制限されていたが、ポスターを見た教職員から視聴希望の連絡があった。

熱量が伝わるライブトーク

2020年6月16日(火)午前10時40分からメディア文化論のウェビナーがYouTubeからライブ配信された。セミナーの出演者の塩崎、西川、松本、辻野が、それぞれ伊賀、京都、尼崎、大阪からSkype(オンラインビデオ通話)に入り、辻野がディレクターとして指示を出して全体を進行させ、また配信機材を担当して画面を切り替え、資料を見せ、テロップを入れるなどの操作を行なった。学生を含む参加者は、YouTubeにアクセスしリアルタイムに公開講座を視聴する。チャット機能を用いて、コメントを書き込むこともできる。

西川が公開講座のホストとして90分のトークをファシリテートした。最初に西川が「メディア文化論」公開講座の趣旨とHCMの技術協力をえたウェビナーの配信と参加方法を説明した。そしてゲストスピーカーを紹介し、最初に塩崎監督と西川の対談形式で話し、その後松本が議論に参加し塩崎とディベートするという流れである。塩崎は、映画プロデューサーを東京で務めつつ、大手映画の製作にも携わった。そこで、その製作方法や映画の権利問題に疑問をいただくようになり、地方に拠点を移して映画製作の方法を模索してき

た経緯を話した。塩崎監督作品『かぞくわり』は、製作委員会方式ではなく、奈良を拠点に映画のテーマに賛同するメンバーによって設立された「有限責任事業組合」の共同製作という方式をとった。欧米の地域に拠点を置くフィルムコミッション(FC)と日本のFCとの違いや、ツーリズムとは一線を画した映画作り、地域から発信することの難しさと魅力など話が展開した。

そして最後の20分で、塩崎と西川の対談に松本が参入すると、塩崎の話が熱気をました(図表1-2)。松本も、アメリカの大学で映像制作を学び、帰国後は、テレビのドキュメンタリー番組を多数制作してきた¹⁵⁾。視聴率が重視されるテレビ業界で活躍する松本と地方を拠点に新しい映画作りができないかを模索する塩崎、映像制作に携わる2人のプロフェッショナルの議論は、それぞれの活動、制作現場から発せられた問題提起であり、視聴者を引き込む迫力があつた¹⁶⁾。

この公開講座に参加した学生の感想の一部である。「今回のウェビナーの対談に自分自身もコメントができました。今までメディアといえばマスメディアという印象しかありませんでしたが、この授業を受けるたびにコミュニティメディアは私たちの身近にあるコミュニティツールであることを実感しました。人とのつながりは、視聴者同士をつなぐだけでなく、配信側と視聴者もつながり、視聴者が配信に携わることや配信者同士から視聴していない人にまで新たな出会いが生まれる可能性を秘めていると感じました。今回の

ウェビナーでは、地域で映画を作っている塩崎さんとテレビドキュメンタリーを制作している松本さんは違う現場で働き、媒体も異なりますが、人に何かメッセージを伝えるという点で同じと言えます。伝える手段は違うけれど、映像制作を扱うという共通点があったからこそ、お二人の対談は、仕事について専門的な深い内容にまで発展していったのだと思います。全く映像を知らない人ではこの対談は生まれなかったと思うと、とても貴重なお話を拝聴できました」。

この日の授業課題は、公開講座を受講した感想を300字程度にまとめるという内容であったが、多くの学生たちが、その何倍もの字数のコメントを書き綴っていた。このウェビナーは、2020年度「メディア文化論」において、科目担当者の辻野・西川・松本が「顔」を出すリアルタイム遠隔授業であったが、15回の授業全体を真ん中で、参加者の関心を強く引き寄せ、「メディア文化論」第3部の担当者をライブに紹介することにもなった。

受講生からのリアクションへの応答

メディア文化論のウェビナーは、MEDIA ROCCO Webサイトのアーカイブに期間限定で公開した。動画のライブ配信とアーカイブの視聴は370回ほどであった¹⁷⁾。HCMとの連携により、大学の教室で開催される通常の講座をはるかに越える数の参加者を得た。受講生の他に甲南大学の教職員やHCMの関係者も視聴した。受講生は、公開講座を視聴した感想を、その日の授業課題としてMy KONANに記入した。塩崎監督が出演した6月5日のラジオ番組と、16日のウェビナーという2度にわたるトークへの受講生からのコメントは、A4用紙にまとめると全部で70枚ほどの分量となった。映画に関する内容の他に、塩崎の映画製作への思いと試行錯誤の道のり、人生観に触れ、塩崎の「挫折」体験と乗り越え方を問う内容も多かった。また、コロナ禍という非常事態の影響もあり、就職活動や自身の将来への不安を訴えアドバイスを求める声もあった。ウェビナーで塩崎は、映画製作は、挫折の連続だが、「挫折を味わえるのは自分しかなく、挫折を力に変えることができるのも自分しかない。挫折を含めたプロセスを物語として自分に取り込んでいけばよいのではないかな。踏み出してみれば変わることもある」と視聴者へ語りかけた。

学生と監督との対話は、さらに続いた。7月に西川宛に塩崎からメールが届いた。添付ファイルには、「甲南大学メディア文化論公開講座にご参加頂いた皆

様へ」と題し、A4サイズ12枚にわたり文字がぎっしりと詰まった文章が綴られていた。学生からの感想の内容一つひとつに対する塩崎からの真剣な応答であった。読む者にとっては、映画製作の現場と協働の意味と方法を学び、考える貴重な資料であり、同時に、甲南大学「メディア文化論」の受講生とウェビナーの視聴者との対話の中で生まれたパーソナルな「手紙」でもあった。塩崎からのメッセージは、「メディア文化論」最終回の授業資料に掲載した。塩崎からの長文のコメントは、同じ授業を受けた他の受講生たちからの質問や意見を知ることにもなった。学生からの授業コメントには、「すぐに答えを求めない」「自分探しではなく自分自身と向き合う」という塩崎からのメッセージに呼応するように、自分の「夢」を懸命に綴る文章もあった。

「メディア文化論」全体の最終課題では、受講生はMEDIA ROCCOの動画配信番組「ほっとタイムこうべ」、「VICE Media」のドキュメンタリーフィルム、WRFUの日本語ラジオ番組「Harukana Show」、いずれかを選び、番組企画(1200～2000字)を作成、Web提出した。これを3人の教員が読みコメントして、前期の授業を振り返る座談会を動画として収録し、授業の最終回とした。文学部5学科から異なる学年を含む多人数を対象とする講義であったが、毎回の受講生のコメントから、慣れないオンライン授業やコロナ禍という状況への「しんどさ」だけでなく、4人の講師の趣向を凝らした授業を「楽しむ」学生たちの声も伝わってきた。オンライン授業であっても対面授業であっても、講師たちの授業への取り組み方や自身の活動や人生への向き合い方が伝わることによって、受講生一人ひとりも「語り」始める。その声を授業に活かしていくことで、伝える、つながる「メディア」の面白さにも気づくのではないかなと思う¹⁸⁾。

2 「発展研究FⅠ」(実習科目): オンラインで自他の暮らしを見つめ今を伝える

「今年は新型コロナウイルスの影響で行動範囲が非常にせまくて作りづらいという面もあったんですけど、そのハンデを逆に活かして、それぞれの作品の幅が広いものになっています。暗い世の中ですが、この上映会では楽しんでいただきたいと思います」。

2020年7月22日、「発展研究F(メディアコミュニケーションと表現Ⅰ)」(以後「発展研究FⅠ」と記

す」(映像制作実習科目)のZoomによる上映会は、この学生の司会の言葉で始まった。この言葉どおり、映像作品上映と、参加者と学生との間の熱い意見交換を含めた2時間余りにわたる上映会を見届け、初めての試みとなったオンラインでの映像制作実習授業を終えることができた。

2-1 授業目的と実施形態

授業実施形式の変更：対面からオンラインへ

新型コロナウイルスの影響が日に日に拡大していった2020年3月下旬、関西の大学では前期授業の開始日程やその実施方法を模索していた時期であり、辻野が科目担当した大学もそれぞれ対応が異なった。甲南大学の場合、前期の学年暦は2020年4月20日から開始し、2週目まではオンラインで授業を実施するようにとの連絡が届いた。甲南大学文学部社会学科が提供する科目である「発展研究FⅠ」は、大学の近隣地域、兵庫県神戸市東灘区をフィールドにグループで映像制作に取り組んできた実習科目である。学外へ学生が足を運び対面による制作活動を行ってきた映像制作の実践科目を、感染拡大の状況下になどのように実施していけばよいか？このような問いが突きつけられることとなった。

2020年4月7日に緊急事態宣言が発出され、兵庫県と大阪府がその対象地域となり移動制限が続く中、Web授業が3週目以降も続く可能性を考え、例年の映像制作実習内容と実施方法を大幅に再考する必要性に迫られた。当該科目担当初年度の2012年度から2019年度までは一貫して、取材エリアを大学のある神戸市東灘区に設定し、グループ制作を行ってきた。それは映像制作を通して地域と関わり、対話し、学ぶプロセスを重視し、そこからの学びを映像作品の上映会という形で発信する授業内容で構成していたからである¹⁹⁾。しかしながら、新型コロナウイルスの影響下、オンライン授業が継続となるのか、それとも途中で対面授業へシフトするのか大学の方針が定まらぬまま前期授業が進んでいくなかで、柔軟に対応せざるをえない状況となった。つまり、学生たちが自宅等からのリモートでの授業参加へ変更となったため、取材エリアとしての東灘という地域の設定を外さざるをえず、大学キャンパスへの立ち入りが禁止となり、映像制作に必要な大学の設備と機材が使用できず、直接の指導ができないうなかで、どのようにして映像制作実習を可能とするのかという難しい問題に直面することとなった。こうした環境で初めての試みとして、授業実施内容と方法、

受講生たちの学びのプロセスと他者へ開く上映会について、すべてをオンラインで実施することとした。

授業を実施する上での様々な問題点、課題については2-2以降で述べていくが、辻野が2010年から関わっている地域メディア、特定非営利活動法人ひがしなだコミュニティメディア(以下、HCMと略す)の活動の1つであるインターネット放送局MEDIA ROCCOは、新型コロナウイルス感染拡大を見据え、いち早く、それまでのスタジオ配信からリモートで放送局スタッフの自宅をつなぐ多地点ライブ配信へと移行することを決定し、2020年3月1週目から新たな配信方法で番組を開始していた²⁰⁾。この地域メディアでの多地点ライブ配信を含む8年間余りの活動で蓄積した辻野の経験が、後述するように、オンラインでの映像制作実習授業の実施に大いに活かせることとなった。

映像制作形式の変更：グループ制作から個人制作へ

先に述べたとおり、「発展研究FⅠ」は、基本的な映像制作のプロセスを実践的に学び、自ら企画した内容を映像という形で表現し、上映会を通して他者へ伝える科目である。そして社会調査の手法を活用した取材とビデオカメラをツールに学生が地域の日常に目を向け、そこで暮らす人々や団体と接点をもつ機会を通して、コミュニケーション力・企画力・実践的行動力を培うことを目的としている。当該科目は甲南大学文学部社会学科3年次配当、前期、実習形式の科目である。学期初めに事前登録を行い、例年はグループで映像制作に取り組むため20人前後の学生が受講可能だったが、今年度は教室に集まりグループワークができる環境になるか不透明であったため、個人制作に切り替えて実施することとした。そのため受講生は10人となった²¹⁾。

最初の2回はオンデマンド授業で、3回目からはリアルタイム遠隔授業で実施し²²⁾、前期全ての授業がオンラインとなることが大学の方針として示された6月以降もこの形式での授業を続行することとなった。授業回数は15回実施であったが、前期開始が遅れてスタートしたため、土曜日に2回授業を行った。制作期間は4月22日から7月22日上映会までの3ヶ月間となり、例年より半月期間の短縮となった。新型コロナウイルスの影響と受講生との毎回のやりとりと制作状況に合わせて15回の授業計画を柔軟に変更しながら実施し、最終的には図表2-1のようなスケジュールで行なった。一般的に映像制作のプロセスは、①プレ・プロダクション(企画・事前調査)、②プロダクション

図表 2-1 2020年度「発展研究 F (メディアコミュニケーションと表現 I)」授業日程

| 回 | 月日 | 曜日 | オンデマンド/ リアルタイム | 内容 | アクティブ・ラーニング (*Zoom で個別サポートは随時) |
|----|------|----|-------------------|--|--|
| 1 | 4/22 | 水 | オンデマンド | {プレ・プロダクション} オリエンテーション 映像制作のプロセス/日々の気づきを記録する | |
| 2 | 4/29 | 水 | オンデマンド | 映像作品の共通テーマ「日常」について考える | |
| 3 | 5/13 | 水 | リアルタイム | 映像作品の共通テーマ「日常」について10人の視点から深める | アイスブレイキング:自己紹介 ブレインストーミング「日常」→口頭発表 |
| 4 | 5/20 | 水 | リアルタイム | 映像作品の構想を考える | 口頭発表 |
| 5 | 5/27 | 水 | リアルタイム | 映像作品の企画を考える | Zoom チャットでピア・ラーニング →学生間コミュニケーション |
| 6 | 5/30 | 土 | リアルタイム | 事前調査の進め方/調査倫理/安全 | |
| 7 | 6/3 | 水 | リアルタイム | 映像作品の企画プレゼンテーション | MyKONAN「グループ学習」でピア・ラーニング →学生間コミュニケーション:各学生の企画書とクラスメートのチャットコメント記録 MyKONAN「課題」で教員へ「制作日誌」提出 →学生教員間コミュニケーション |
| 8 | 6/10 | 水 | リアルタイム | 映像作品の企画書を検討する 映像作品の構成を考える/取材依頼のしかた・準備/絵コンテを描く | 口頭発表 MyKONAN「課題」で教員へ「制作日誌」提出 →学生教員間コミュニケーション |
| 9 | 6/17 | 水 | リアルタイム | プレ・プロダクション最終確認 | MyKONAN「課題」で教員へ「制作日誌」提出 →学生教員間コミュニケーション |
| 10 | 6/24 | 水 | リアルタイム | {プロダクション} 各自の進行状況に沿って取材準備・プロダクション実施 ポスト・プロダクションの説明 | MyKONAN「グループ学習」でピア・ラーニング →学生間コミュニケーション:各学生の質問リストにクラスメートチャットコメント記録 MyKONAN「課題」で教員へ「制作日誌」提出 →学生教員間コミュニケーション |
| 11 | 7/1 | 水 | リアルタイム | {ポスト・プロダクション} ポスト・プロダクションの作業 取材内容を整理する/編集準備 | MyKONAN「課題」で教員へ「制作日誌」提出 →学生教員間コミュニケーション |
| 12 | 7/4 | 土 | リアルタイム | ポスト・プロダクションの作業 編集ソフトウェアで編集する | Zoom の画面共有で編集ソフトウェアの操作画面を表示 学生は各自の PC で編集ソフトウェアを起動し編集操作実践 MyKONAN「課題」で教員へ「制作日誌」提出 →学生教員間コミュニケーション |
| 13 | 7/8 | 水 | リアルタイム | ポスト・プロダクションの作業 発展研究 FII 上映会実行委員会発足 広報 (フライヤー作成) | MyKONAN「グループ学習」でピア・ラーニング →学生間の協働:上映会準備 MyKONAN「課題」で教員へ「制作日誌」提出 →学生教員間コミュニケーション |
| 14 | 7/15 | 水 | リアルタイム | ポスト・プロダクションの作業 上映会タイムスケジュール確認 | MyKONAN「グループ学習」でピア・ラーニング →学生間の協働:上映会準備 MyKONAN「課題」で教員へ「制作日誌」提出 →学生教員間コミュニケーション |
| 15 | 7/22 | 水 | リアルタイム | Zoom オンライン上映会 | 制作者 (学生) と来場者 (学内外) 間コミュニケーション |

(撮影), ③ポスト・プロダクション (編集) から構成されるが, 当該科目では, ②で行う取材や撮影は授業時間外に各自で実施している。2020年度は, ①のプロセスに授業回全体の 2/3 を費やし, ③のプロセスに授業回数後半 1/3 を費やした。結果的に項目①により多くの時間を費やすこととなった。

オンライン制作にともなう共通テーマの変更

本科目では映像制作を通して学生が地域へ目を向け, 地域から学び, 制作した映像作品を上映会という空間で他者へ伝えることを目的としている。そのため例年取材エリアを大学近隣の神戸市東灘区とし, 共通テーマを設定して制作を行ってきたが, 今年度は対面の取材はできなくなったため, 取材エリアの東灘区という枠を外した。そして, 映像作品の共通のテーマを

「日常」と設定した。最終的に10本の映像作品が制作された²³⁾。

2-2 オンライン映像制作授業実施上の技術的問題

受講生と大学の状況を見極める

オンラインで実習授業を行う場合, 実施環境に関する事前の確認が必要となってくる。①受講生の受講環境, ②受講生の所有機材, ③フリー (無料) の動画編集ソフトウェアの選定, ④大学施設・機材利用の可能性, ⑤実習授業に関する学部学科の方針の把握, というように, 対面授業ではなかった準備作業が必要になることがまず頭に浮かんだ。

①～③に関しては, 前述したように, 筆者の地域メディア活動での経験を活用し開講準備を進めていった。一方, 今回のコロナ禍のような特殊な状況下では, 授

業実施上の根幹とも言える項目④と⑤について、教員間の連携・情報共有が重要だと認識させられた。とくに非常勤で科目担当をしている教員にとっては、学内の動きや方針を共有しづらい面があり、学内の窓口となる教員の存在が非常に重要であると実感した。今後、学外の非常勤教員と学内教員との間の関係性強化や組織内の情報共有の構築が望まれる。

確認項目①～③のうち、①については授業実施方法と制作方法を定める上で受講生に確認することが必要であった。受講生は自宅など遠隔からインターネットを介して授業に参加するため、インターネット環境によってはリアルタイムで授業を受講できない場合がありうる。そこで最初の2回のオンデマンド授業期間にMy KONANの機能「クリッカー」²⁴⁾を使い受講生に受講環境を確認した。その結果、リアルタイム遠隔授業へ切り替えても大丈夫だということが分かり、実施方法をリアルタイムへ移行することとした。②については映像作品の制作方法に関わってくことで、学内の設備や機材が利用できない場合、受講生が所有している機材で撮影・編集をすることになる。例年はビデオカメラで撮影し、有料動画編集ソフトウェアAdobe Premiere Elementsを使用していたが、これらを使用できないと考えた方がよい。受講生に確認したところ、ビデオカメラを所有する者2人、デジタルカメラを所有する者7人、どちらも所有しない者1人であった。スマートフォンは全員が保有していたので、それらの機材のうちいずれかを使えば制作できると判断した。

映像制作ツールの選定

確認項目①～③のうち、③の選定には最も時間を費やすこととなった。なぜなら映像作品制作をしてきた者は通常有料編集ソフトウェアを使用しているため、フリーの動画編集ソフトウェアを使用したことがない場合が多いのでその情報についても知らないことが多い。フリーの動画編集ソフトウェアの選定については、辻野の地域メディア活動での経験と情報が役に立った。HCMはメディアを誰もが使い情報発信ができるようにという趣旨のもと、動画編集ソフトウェアはフリーのものをいくつか使用してきた経験があり、実際にそれらのソフトウェアを使用し、制作ワークショップも実施してきた²⁵⁾。この時の経験をベースに、いくつかのフリーの動画編集ソフトウェアを試し、受講生のパソコンの性能と照らし合わせ、最終的には、Open Shot Video Editorを利用することにした²⁶⁾。ただし、受講生によっては別の編集ソフトウェアをすでに所有

しており、そのソフトウェアの使用に慣れている場合にはそちらを使用したり、パワーポイントを使用した動画制作方法等の情報も合わせて提供し²⁷⁾、編集作業にも臨機応変に柔軟に幅をもたせることとした。

こうした検討の結果、従来通りとはいかないが、映像作品を制作するプロセスを実践的に学ぶことは可能と判断し、映像制作を実習という形で行うこととした。基本的な授業実施方法としては、My KONANの活用を軸として、当該サイトにない機能、例えばリアルタイム遠隔授業に必要なビデオ会議システムとして、ZoomやMicrosoft Teamsを活用した。My KONANの使用機能としては「授業資料」「課題」を、そして受講生同士のコミュニケーションと受講生一人一人の制作プロセスの記録のためには「グループ学習」²⁸⁾を使用した。

2-3 ライブ感のある授業空間の構築：大学が有する資源を活用する

ポータルサイトは互いに学びあう空間

Web授業を行う場合、学習支援システム(LMS: Learning Management System)をどのように活用するかが重要となる。多くの大学では以前からそれぞれ特色のあるLMSを導入していたが、コロナ禍においてオンライン授業が多く実施されることにより、その活用が急速に進んだと言える。

甲南大学の当該科目においては、学生にとってはこれまで受講に際し利用したことのあるLMS、学生向けのポータルサイトMy KONANを主に活用することにした。加えて、このサイトにない機能であるビデオ会議システムのZoomとMicrosoft Teamsや、動画データファイルを保存できるクラウド機能のOne Driveを利用した。My KONANの機能のうち、「グループ学習」や「課題」を次のように活用することで、授業参加者間のコミュニケーションを活性化し、ライブ感のある授業空間をつくる試みを行なった。

「グループ学習」は、本来は、受講者を複数のグループに分け意見交換を行う機能で、例えばクラスを複数のグループに分けてグループワークをするという活用の仕方がある。この1つのグループのことを「プロジェクト」と呼んでいる。

本授業では、1グループに1プロジェクトではなく、受講生一人ひとりに1プロジェクトを割り当て、制作プロセスのプレ・プロダクションからポスト・プロダクションまで各自の映像作品の企画に関するクラスメートのコメントと、それに対する本人の反応が一貫

図表 2-2 「グループ学習」を使った映像作品制作記録

| |
|---|
| 2020.06.03 |
| よろしくお願いします。 |
| 家族・自分への密着はどのようにして撮影しますか？ |
| 着眼点がおもしろいと思いました。 |
| 映像に対するエネルギーが感じられて、 具体的な映像の完成が楽しみになりました。 |
| 2020.07.01 |
| 自分にひきつけたテーマに変わっていたのでおもしろいと思いました。 |
| インタビューの発言に関連するイメージ画像や映像を入れると、単調になりづらいと思います。質問者と回答者の映像を分けて、発言している人だけに焦点をあてたカメラワークにするのもいいと思います。 |
| 寂しさをどう描写するのかがになりました。 |
| プライバシー保護の点で難しいところもありますが、内容としては充実しているなと思いました。 |
| 2020.07.15 |
| なんの写真かわかるテロップがあればいいなと思いました。 |

して記録として刻まれていく場として活用した。図表 2-2 のように、「グループ学習」機能では書き込みは LINE のチャットのように表示され、対面授業における口頭でのやりとりよりも活発に意見が書き込まれる結果を生みだし、学生間のコミュニケーションの活性化にとって非常に有効であったと言える。

また制作プロセスが進んでいくと、各自のアイデアや撮影の工夫や編集のヒントなどを交換する場ともなっていた。ビデオカメラをほとんどの学生が所有していなかったため、取材・撮影にはスマートフォンを主に使用し、その他のデバイスを組み合わせて行なった。教員からのアイデアだけでなく、トークアプリ+電話、Zoom 使用、スマートフォンのみ使用、スマートフォン 2 台で音声録音+PC の内蔵カメラで自身を撮影など、取材対象者がアクセス可能なメディアを活用し、そこに自身が持てる技術を動員する方法で実施したため、個々の学生が多様な取材方法を生みだし、その技術を互いに教え合う環境醸成につながった。

個別のニーズのサポート

次に映像制作するプロセスにおいて、教員と学生の双方向コミュニケーションも重要となる。特にオンライン授業では、学生がどのような問題や課題に直面しているのか把握しづらい側面がある。学生からの質問や相談を受けつける方法として、My KONAN の「課題」機能を活用した。つまり、「課題」機能を使い受講生は、毎回「制作日誌」を提出する。その「制作日誌」

誌」には、各回の課題レポート内容だけでなく、個別の相談や質問も合わせてそこに書き込むように伝え、個別のニーズへの対応を行なった。その他にも学生からの個別の相談や質問を受けつける方法として、My KONAN の「Q&A」機能と、授業終了時や授業時間外のビデオ会議システム (Zoom) を利用した。当該科目は映像制作初心者対象の科目であり、2020年度も映像制作を全く経験したことのない学生が多かったので、できるだけ個別に対応ができる環境を整えた²⁹⁾。

提出された毎回の制作日誌には、「日常という同じテーマであっても考え方や捉え方が大きく異なり、他者の意見を聞くことで新たな気づきがありおもしろかった」、「それぞれ、映像作品の様々な構想があり、作品が出来上がるのが楽しみだ」、「自分の質問リストの甘さに気づいた」などのように、クラスメートとのやりとりに刺激を受け、制作の楽しさを伝える様子が綴られている。

ライブ感のある授業空間の構築

教員が感じるオンライン授業の難しさの 1 つに、顔が見えない状況で授業を実施するという点が挙げられる。それは教員と学生、学生間の授業参加者すべてに当てはまる。「顔が見えない」ということは授業参加者の表情や息遣いや雰囲気など言語以外の情報、つまり対面であれば意識せずに得られていた非言語の情報を得にくいということである。My KONAN やビデオ会議システムはその部分を得る 1 つの有効な手段である。当該科目においては、先述したような LMS とビデオ会議システムの活用方法でこの課題に取り組んだ。

加えて、制作の 1 つひとつのプロセスにおいて取り組んだ課題とクラスでの共有方法では映像 (静止画・動画) を意識した実習を実施したことがライブ感のある授業空間につながっていったのではないかと考える。例えば、映像作品の企画段階で共通テーマ「日常」を考える課題、「日々の気づきを記録する」に取り組んだ。普段見慣れている空間を見つめ気づいたことを記録する。その際に自身の五感を働かせて観察し、記録することをポイントとし、表現方法は文字、イラスト、映像など自由形式とした。次に、その日々の気づきを「他者に伝える」を意識し、発表の表示資料を作成する課題を出した。次の授業回でクラスメートへ向けて Zoom を使い、発表を行った。つまり記録した気づきを発表という場で他者と共有し他者へひらく機会となった。その発表に対してクラスメートはコメントを「グループ学習」機能で書き込んでいくライブな授業

空間作りへとつながっていった。

2-4 地域と自他の暮らしをみつめ、作品をつくる 資源を活かした制作プロセス

学習支援システムのように、大学が有する資源を活用し、ライブに双方向コミュニケーションのある授業空間をつくりだそうと担当教員は試みていた一方で、学生たちも映像作品の制作プロセスにおいて自身のもつ資源を活用することとなった。

前述のとおり2020年度映像作品は取材エリアを設定せず、共通テーマ「日常」のみを共通項として各自が制作に取り組んだ。受講生たちの取材対象や取材エリアとして、身近な対象、身近である居住近隣地域が選ばれた。身近ではあるが、10人が選んだ取材対象やエリアは、自己、家族、友人、クラブの先輩、アルバイト先、SNS、居住地域の公共空間など多様な対象となった。これまでの作品づくりと異なり、受講生一人ひとりが自身のもつネットワークやつながりを見つめ、積極的に活用することで、対象を見出していった。それらの選択された対象は普段から接点があり、対象に対してある程度の情報を有していたため制作プロセスを進めていく上で利点があったからだとも言える。今期の映像制作実習の特徴として、受講生自身の人とのネットワークや場とのつながりという個人の資源を積極的に活用し、学生自身の「身近」な地域や人を取材対象として見出していく制作スタイルになったと考えられる。

「身近」な他者との関係が生みだす葛藤

その一方で映像制作をするうえで考慮しなければならない肖像権について、例年とは異なり思わぬ反応が受講生たちの間で見られた。昨年度までは大学近隣エリアが取材地域で、そこは学生たちにとっては通学エリアではあるけれども、いわゆるその人自身にとっての「身近」な対象ではなかった。しかし今回は制作者自身の「身近」な対象を撮影し、映像作品として表現し、上映会で他者へ伝える。そう考えた時、迷いや葛藤が生じ、作品中にその人たちの映像を出すことに躊躇を覚え、映像のボカシを入れたり、取材協力者の顔を映さない方法を取ろうという雰囲気がクラス内で共有されていった。

この時は予定していた授業内容を変更し、クラス全体でこの点について話し合う時間をつくるとともに、制作日誌を使い受講生の個別の理由を教員が共有する機会をもつことを通して、受講生たちは制作の次のプ

ロセスへ進んでいけるようになった。

この出来事はコロナ禍で実施した映像制作だからということが要因とはなっているが、一方で映像制作において取材する際には、取材対象が「身近」であってもそうでなくても肖像権の問題として考慮しなければいけない点である。ただ、あまりにも「身近」な他者を映像で表現することになったからこそより彼ら彼女らの中に葛藤が生じ、改めて自他を見つめ直す機会となったのではないだろうか。

非常事態下の調査・取材方法と意識のズレ

今回オンラインで実施した制作活動とこれまでの制作活動における大きな相違点についてここで触れておきたい。これまでの映像制作実習と異なり、映像作品の企画を練っていくプロセスにおいて、担当教員として最も留意した点は、コロナ禍における学生たちと取材対象者の安全についてであった。

2020年5月下旬に緊急事態宣言が解除されたが、依然新型コロナウイルス感染拡大の実態はそれほど明らかになっておらず、どのような行動が学生と取材対象者の安全につながるのか判断できる状況ではなかった。新型コロナウイルスに関する情報や科学的見地については、HCMの地域メディア活動で3月頃から特集番組を組むために収集した情報の蓄積を活用した。

また、フィールドワークを授業として実施する際の行動指針については当該科目を提供する文学部社会学科の「ピアラン勉強会」のメンバーを通じて聞いていただいた。結果としては時期的に行動指針が立てられるような情報が世界的にも不足していた背景もあり、明確な方針の回答は得られなかった。

これらを総合的に考慮し、取材・撮影に際しては対面では行わないことを徹底するように受講生たちへ伝えた。受講生からは、「家族・親族ならばいいか」という質問があった。このような質問に対しては、同居の家族は可だが、居住を異にする家族・親族との対面取材は避けるように伝えた。

取材対象はそれぞれにとっての「身近」な人であり、場所で、日常的に会っていた人であり訪れていた場所である。時折帰省した際に会う機会のあった親族になぜ会っての取材はいけないのか、自己や他者の安全と制作のはざままで、ともすると、対面取材は行わない意識は飛んでしまい、直接取材する行動へ向かいそうになる瞬間が見られた。この時も授業内容を変更し、クラス全体で話し合う機会を持ち、安全性についての意識を再度共有するようにした。その結果、学生たちは、

安全性を意識した状態での新たな取材方法や撮影方法を模索し始め、手元にある機材や各自のスキルを組み合わせる方法を編み出していき、それらを授業の場でシェアしていくことにつながっていった。

こうしたコロナ禍における安全を優先させる形での映像制作プロセスを経て、2020年7月22日、オンライン上映会を迎えることとなった。

2-5 オンライン上映会：2020年の今を伝える

コロナ禍の今を伝える場をつくる

上映会をどのように開催するのかという問題は学期中つねに検討を繰り返し、6月下旬まで議論を積み重ねることとなった。上映会は、学生たちが自身の伝えたいことを、映像作品を介して他者へ開く重要な機会である。また来場者の意見に耳を傾け、考え、交流する機会でもある。この頃までには、前期の最初の頃よりZoomの機能が改善され進化してきていたので、Zoomを使えばネット環境に多少左右はされるがオンラインでの上映会実施可能な状況であった。

授業科目の到達点での学びをどう設定するか。当該科目は制作プロセスでの学びに重点をおいているが、同時に映像制作である以上、作品を他者と共有することから生まれる学びも重要である。上映会は、映像作品という目に見える形で伝え、それに対する反応を直接受けとることができる場である。

2020年7月8日、最終的に上映会を開催することを決め、「発展研究FⅠクラス2020上映会実行委員会」を立ち上げた。自身が制作した映像作品を自ら伝える場として上映会を学生たち自身で運営する従来どおりのスタイルで準備していくこととなった。それまでは個人制作が主であったが、上映会準備に入ると、チームで動かなければならない。実行委員会のリーダー2人、広報（フライヤー作成）担当者2人、総合司会2人、タイムキーパー1人、記録1人と担当を決め、学生主体で準備を進めていった。その際にも準備作業のやりとりに、My KONANの「グループ学習」機能を活用し進めていった。

10作品をどう伝えるか。それを表現する媒体として、フライヤー（図表2-3）に想いを込め、広報担当の学生が上映会のテーマを、「変わらない日常と変わりゆく日常」と決めた。制作者である学生たちが自他の暮らしを見つめ、自らの視点で切りとった2種類の「日常」を、上映会を通して他者へ伝えることとなった。



図表 2-3 上映会フライヤー

自身の視点を伝える・他者の視点を知る

上映会は受講生と学内外からの参加者合わせて19人であった。受講生たちは冒頭から真剣なまなざしで来場者を見つめ、緊張した面持ちの司会者の挨拶を皮切りに上映会が始まった。当初の予定時間の1時間半が過ぎ、最終的には約2時間、そしていつもの授業なら、すぐにZoomから退出していく学生たちだが、この日は30分ほど誰も立ち去ろうとしなかった。

上映会での来場者とのQ&Aでは、学生たちは自身と同じ意見に共感する一方、ときに自身とは異なるコメントに刺激を受け、映像に対する固定概念を崩されたことに新鮮な驚きと学びを見い出している。受講生たちが制作プロセスと上映会を通して、何を考え、他者とのやりとりをどのように捉えたのか。上映会終了後に各自が授業全体を振り返り作成した最終レポー

トには次のように記されている。来場者から「映像作品のテロップが多い。テロップを多用せず、視聴者の感じ方や捉え方に委ねる方法もある」との指摘に対して、「視聴者の感じ方や捉え方に委ねることの大切さと面白さに気づいた」、「YouTubeの投稿者が語るタイプの動画は字幕が全てついているのが好まれるが、今回の映像作品では違うことに気づいた」、「テレビは制作者の意図により、あらゆる方向へもっていくことが可能な媒体だと改めて思った」、「語り手の想いをきちんと汲み取り、本当に伝えたい部分を損なわないような編集が大事だ」などの記述があった³⁰⁾。普段学生たちが見慣れているYouTubeなどに多用されるテロップ付きの映像が、制作者の意図を視聴者にいかに恣意的に見せているかという点について気づかされたようであった。

そして対話は続く

上映会を終えた学生たちは最終レポートの中で、上映会時に来場者の質問に答えきれなかったとして、来場者と対話を続けていく。「上映会ではうまく伝えることができなかったが、制作の想いをまとめ、伝えたいと思う」。またある学生は、「授業のおかげで自分と向き合う時間が増え、自分の将来の方向性が固まりました」と語る。

コロナ禍という世界的パンデミックの時期を人々は現在進行形で経験している。映像制作に取り組んだ学生たちはその制作プロセスを通して、今、この時の自分自身を見つめ、身近な他者の語りに耳を傾け、上映会で他者へ伝えた。この経験と記憶は、学生たちのこれからの生き方に影響を与えていくのではないだろうか。

オンライン授業であっても対面授業であっても、学生の気づきと学びには、他者へ伝えることの難しさと伝えようとするものの大切さ、プレ・プロダクションの重要性、達成感、取材と上映会での刺激と発見と共感が綴られている³¹⁾。

一方でオンラインの映像制作では、「身近」な地域と他者、そして、自身を見つめる機会となり、対面の映像制作よりも制作者と取材協力者双方の安全性を意識し、肖像権について深く考えることにつながった。そして、オンライン授業での積極的なLMSの活用がクラスのコミュニケーションを活発化し、機材と設備がない環境で学生自らが工夫し、新たな手法を生み出すことにつながった。こうしたオンライン授業での映像制作の実践と学びには、対面授業においても実践で

きる要素があり、それらを活かしていくことで、他者とつながり、他者から学び、表現し伝える実践の面白さが学生一人ひとりの深いより学びへとつながっていくのではないだろうか。

3 オンライン授業をメディア実践する

本論文の最後に、1と2で紹介したオンライン授業例やその他の科目、筆者たちが関わる地域メディアの現場での経験を参照にしながら、コロナ禍においてWebを活用した授業を通して改めて見えてきた「コミュニケーションの問題」を3つの側面から考察していく。第1に授業参加者の「ピアラーニング」、第2に「対話」を活性化させる仕掛け、第3に「身近」を見つめ社会に「伝える」意識である。

3-1 そこにある資源を活用したピアラーニング

新型コロナウイルス感染が急速に拡大し、学生、教職員が、それぞれの場所から大学が提供するシステムを利用することになった。この時、西川も辻野も、地域メディアと教育現場は、同様の問題に直面しているという印象をいだいた。どちらの現場においても、対面的な関係を基盤として活動を展開してきた。緊急事態においては、参加者一人ひとりがそこで利用できる物、情報、関係を活かした、新たなコミュニケーションと協働の方法が求められた。

教育関係者のピアラーニング

甲南大学では、全学教育推進機構³²⁾のもと「教育学習支援センター」や「共通教育センター」がWebを活用した授業に関するFD講習会を開催し、LMS活用法や教材作りについてテーマや機能別の対処法を詳細に記した「Tip集」を32本作成して、学内に限定公開した。また、これらのセンターは、個別の相談にも応じた。しかし、各授業科目の実際の対応は教員にゆだねられ、それぞれが悪戦苦闘することになった。文学部では、4月の初めには各学科の異なる専門領域の教員が様々な授業の配信コンテンツ・サンプルを提示し、非常勤教員・専任教員はそれぞれ、こうした例を参考にしながら、オンライン授業の準備に取り組んだ。社会科学においては、複数の教員が共同担当する科目がいくつかある。各教員が得意とするスキルを伝え合い、失敗例も含め情報交換しながら授業を進めた。非常勤教員を含む科目担当者間で、「惜しみなく伝え、学び合う」経験となった。

非常勤教員の辻野は、大学によって学習支援システムの機能や「使い勝手」は一様でないことにいち早く気づき、オンライン授業においては、その大学のLMSの特質を徹底的に活かす、という方針を立てていた。また新型コロナウイルス感染拡大防止の学内外での調査研究活動のガイドラインについても、実習を実施するうえで不明な点は、学科や関係部署の窓口に問い合わせた。専任教員の西川は、「メディア文化論」やその他の科目においても、辻野をはじめとする共同担当の非常勤教員をとおして、「甲南大学がもつ資源」や「そこにあるもの」にしばしば気づかされた。

甲南大学文学部ではまた、2016年より、専任・嘱託の教職員、学部、部署などの立場を超えて授業作りについて学び合う「ピアラーニングについて考える勉強会」を自主的に開いている（西川 2018: 99-100）。その時々に参加者が異なる5人から10人程度の小規模な集まりである。不定期に開催され、毎回、数人が各回のテーマに沿って20分ほどプレゼンテーションをして、集まった人たちがざっくばらんに話す。2020年度前期の授業期間の終了後に、「オンライン授業のふりかえり」と題し、「共同担当者によるリレー式授業」「メディア実践系科目の実習」「社会調査関連科目」という3回シリーズの勉強会をZoomで行った³³⁾。初めてのオンライン開催であったが、本校の授業に協力した他大学の教員にも声をかけ、異なる教育現場の事情やそこでの多様な取り組みを知る機会となった。

出入り自由な問題発見型の情報交換の場は、関わった人々のあいだのゆるやかなつながりを生む。「メディア文化論」のウェビナー開催や、「発展研究FI」の映像制作の実習も、実は、これまでの「ピアラン勉強会」を通じた教職員のネットワークの延長線上にある。目に見えない関係も「そこにある資源」であると、緊急事態において改めて認識することになった。

受講生の学び合いとコミュニケーション

学内での対面授業と学外でのフィールドワークを前提としていた実習では、コロナ禍においては、その実施が危ぶまれた。辻野が担当する「発展研究FI」の映像制作は、遠隔操作によるリアルタイム授業を工夫しながら進めることができたが、大学にある機材や設備は利用できず、受講生は身の回りのスマートフォンやフリーソフトを使わざるを得なかった。昨年度までの同科目の授業においてできたことが、今年度はできない。2020年度の受講生は、「現状」から出発しなければならない。ところが実際にやってみると、「発展

研究FI」だけでなく、「ピアラン勉強会」で情報交換をした他のメディア実践系科目においても、学生たちは意外にも前向きに、身近な機器やフリーソフトを工夫して使い、新しい方法を編み出していった³⁴⁾。

科目担当者に工夫が求められたのは、辻野が2-3で述べているような、授業参加者間の「コミュニケーションを活性化させる仕掛け」である。辻野はMyKONANの中の「課題」「グループ学習」機能の他、TeamsやZoomなども併用し、受講生の間に、他者に伝える意識を育むと同時に、アイデアや情報を共有し、一つの目的に向かうある種の一体感を生み出していった。受講者数が多い科目であっても、メンバーを10人程度に分け、グループ内やグループ間で、オンライン上でのコメントの書き込みを共有することや、学生たちが使い慣れているSNSのように、毎回の授業における参加者の言葉の共有が時系列的に記録されることによって、共に歩んだ「足跡」が可視化される。これが実習などにおいて、次の段階へ向かう気持ちを押し上げた。

3-2「対話を開く」ダイナミズム

授業参加者のあいだのつながりを意識させる仕掛けを作るだけでなく、「講師と受講生が向き合う関係」の方向をいささかずらし、授業参加者にとどまらずより広く「他者に伝える」場を作ると、授業参加者の意識や想像力が広がり、モチベーションが変わっていく。

講師と受講生の対面的な関係をずらす

対面授業では、教室にいる学生たちが講義に身体的に反応する。ノートをとったり、目を見開いたり、不覚にも居眠りしたり、内職、おしゃべりを始める者もいる。オンライン授業では、そうした受講生の存在が見えづらい。教材提供や動画でも講義が講師から視聴者に向けて一方的になりがちである。また、全てがオンラインの授業になると、パソコンの画面の資料や講師と受講生が、長時間「向き合う」ことになる。教室で行う対面授業でもオンライン授業でも、時には、ゲストに登場してもらうなど、複数の話者の対話を授業に取り入れ、講師対学生の一時的にずらすと、授業空間の流れが変わり授業にめりはりができる³⁵⁾。

アメリカのコミュニティラジオ番組制作を担当するようになってから西川は、大学の授業において他の教員や学生と、ライブにトークをすることが多くなった。複数の講師が1つのテーマを議論する場合もあれば、ゲストを迎えてホストが聞き役となる設定や、3、4

人の座談会をする場合もある。いずれの形式であっても、ファシリテーター役が存在すると、トークの参加者がその人物に進行を任せて自分の話に集中しやすくなり、また視聴者にとっても話の流れをたどりやすい。スチューデント・アシスタント（学部生）、ティーチング・アシスタント（大学院生）と科目担当教員が授業のなかで、ある問題についてトークを始めると、受講生たちは、「先輩」の経験談には熱心に耳を傾ける。トークには、複数の話者の掛け合いによる対話が展開するライブ感があり、また、聴き手が、異なる話者の立場に思い入れを移すことができ、聞き方にも動きが生まれるのである³⁶⁾。

「他者」に伝える場をつくる

甲南大学社会科学部の「メディアコミュニケーションと表現」領域のいくつかの授業においては、多様なメディアを使い、第三者の存在や学外の社会を意識し伝えて学ぶメディア実践の授業を行ってきた。例えば、動画作品の上映会やラジオ番組や動画番組の放送・配信、紙媒体のZINE作品の展示会などである（松川・辻野・西川 2018, 西川 2019, 2020）。こうした科目の2020年度前期の授業では、離れた場所にいる受講生たちがオンラインでつながり、作品制作を通して他者に伝える場を協働して作っていった。授業作りそのものが、メディア実践の現場となった。

「発展研究FⅠ」の映像制作においては、毎年、受講生が主体となって甲南大学のキャンパス内の様々なスポットを会場として選び、自分たちでフライヤーを作り、地域の人々も招き、その年の上映会を演出してきた。2020年度は、本論文2で辻野が詳しく述べているように、オンライン授業においても上映会を実施するという前提のもとで授業を進めたことによって、学生たちの作品制作へのモチベーションとプレッシャーが生まれ、受講生たちの学び合いを活性化させることになった。「ピアラン勉強会」で紹介された「創作過程論」（社会科学部、松川恭子担当、2年次配当、履修者35人）の事例では、「受講生自身が関連する人、出来事、関係、場所からテーマを選択し、Digital Story Telling (DST) の動画を作成した。各受講生がDSTの動画ファイルをOffice365のOneDriveにアップロードした後、Teamsにアクセス可能なリンクを投稿・共有し、互いの動画を視聴したうえで意見交換をした。オンライン授業期間は一人で勉強することが多く、他学生の作品を通して、その人の暮らしや人生にふれ、受講生相互の『つながり』を感じることができ

た」（第29回ピアラン勉強会記録³⁷⁾）。コロナ禍で会えない同級生たちが、それぞれの自分を描くDSTをオンライン上で観て、互いを再発見する。学生にとっても教員にとっても、心に強く残る上映会となった。

「メディア文化論」では、異なる学科から多数の学生が参加するオンデマンドの講義科目であるが、HCMとWRFUという国内外の2つの地域メディアと連携して授業を展開し、ウェビナーを実施することができた。学外から塩崎監督を招き活気あるトークイベントが実施されただけでなく、受講生一人ひとりの声にたいして塩崎自身の「ことば」を投げ返してくれた。呼応することばを次へとつなぐ。これは、オンラインであれオフラインであれ、授業作りの基本的な営みである³⁸⁾。

3-3「身近」を見つめ伝える意識

2020年度前期のオンライン授業期間中は、取材活動など人と直接に会って行う調査は大きく制限され、身近な暮らしを調査対象とすることになった。辻野が2で指摘したのは、日常の社会関係の延長線上で調査を行うことによって、「安全」への意識が希薄になる危険性と、「身内」を取材対象としてとらえ、その内容や映像を他者に伝える際の「プライバシー」や「肖像権」の問題である。

コロナ禍の調査・取材方法と意識のズレ

コロナ禍においては、調査における人と人との関係と距離を、「安全」という側面から突き詰めて考えざるをえない。調査者がウイルスを持ち込み運び出す媒体となりうるのである。辻野が担当したような履修者数が少ない授業であれば、一人ひとりの実習のプロセスに教員が寄り添い、ある程度、把握し、授業参加者が互いの状況を伝えながら問題の打開策を探ることできる。しかし、数十人以上の中規模クラスになると、受講生各自の調査活動のプロセスを知ることは難しい。ましてやオンライン授業においては、教室のように目の前にいる学生への対応をとおして、受講生の調査の進行や調査対象者との関係を知ることができない。西川が担当した「フィールドワーク研究」（社会科学部、2年次配当、履修者50人）は、質的調査の基本を学び、受講生各自がフィールドワークを実施し最終課題として調査レポートを提出する。「調査と安全」について回を重ねて説明し、コロナ禍における調査と安全対策について授業課題においても、各自が意見と対応策をまとめた。ところが、調査テーマと対象を想定し取材

方法を具体的に考え始めると、「安全」はタテマエとなり、いかに調査を実施するかを頭の中で組み立てた理念的な調査計画となってしまう。今年度のフィールドワーク研究においては、人と直接に会う取材は行わないという方針を幾度も確認したにもかかわらず、対面調査にもとづく計画が多く提出された³⁹⁾。

学生たちがおかれている状況や今考えていることを、学生各自が意識して考えるきっかけを作る必要がある。対面授業では、スチューデント・アシスタントの失敗談を含む体験談が受講生の心を開かせ、自分のことを考え始めるきっかけになる。多人数の授業であっても、受講生から提出された課題やコメントの内容を、教員が抜粋してまとめ授業資料として提示することはできる。「フィールドワーク研究」においては、学生が提出した調査アイディアをもとに、対象や内容などを変えた事例として西川が作りなおして授業で紹介すると、その事例に、目的に向かって突進し、安全性や周囲の状況が見えなくなっている自身の姿を見出し我に返る人もいる。授業資料と課題提出のやりとりを何回か繰り返すと、自身の思考を対象化する手がかりをつかみ、受講生のあいだに調査者としての「自覚」が少しずつ生まれ、取材方法をより具体的に考え始める。LINEなどのSNSやオンライン授業を通して使い慣れてきたZoomなどのツールだけでなく、取材相手にとっては利用しやすい電話や手紙などを組み合わせるようになった。

調査者、制作者としての意識

文化人類学のフィールドワークにおいては、調査者の立ち位置（ポジションナリティ）とそこで出会う人々やその社会との関係性を、調査者自身が異なる角度から繰り返し見つめ直す。こうした内省的アプローチを、授業作りにも活かすことができる。上述した「メディア実践系科目」においては、異なるメディアを使いながら、他者に伝えることによって、自己や自身が存在する社会をとらえ直す。

2020年度前期に実施された映像制作の授業では、受講生がスマートフォンなど手持ちの機材を使い「日常」をとらえた。そこでは、「自分にとっての身内」が、自身の手によって、「他人の目に晒される被写体」となる。映像に映し出されているのは、自分がそこに含まれる体内的な世界でもある。視聴者の存在を想像した時に起きる躊躇や動揺について、調査者、制作者でありかつ当事者である「自分」を、他者の視線と社会との関係のなかで何重にも掘り下げてとらえていく。

これは、「オートエスノグラフィー」⁴⁰⁾とよばれる研究・調査手法でもある。辻野が担当したクラスでは、その葛藤を、受講生のあいだで共有し、各自の作品で何を伝えるのか、取材の意図を撮影者も対象者も理解したうえで納得できる方向性を探り始めた。学生たちの映像作品上映会のタイトルは、「変わらない日常と変わりゆく日常」であった。10作品の暮らしの現場は異なるが、コロナ禍における「映像制作のプロセス」への制作者の思いが共有され呼応する上映会となっていた。

上述した「フィールドワーク研究」においても、日々の暮らしや「身内」を調査対象としていた。自分の暮らしのなかで取材し話を聞くからこそ、その記録や提示にはプライバシーについての配慮が細かく求められ、またオンラインでの情報流出の可能性などにも注意して、メディアリテラシーをふまえたレポート作成が必要であることを、繰り返し伝えてきた。ところが、文字ベースの調査レポート作成においては、「身内にもプライバシーがある」ということを映像作品のような肖像権の問題として意識しにくい。ここでも、授業課題として提出される調査記録や受講生のコメントを編集し、授業資料として掲載し、そこから様々な角度の問題を学生に問いかけた⁴¹⁾。受講生の声の集積が、受講生の調査への自覚を少しずつ促した。授業の最終課題となる調査レポートを提出する際に⁴²⁾、そのレポートを来年度の受講生に授業資料として見せてよいかと尋ねた。これに対する回答として、積極的な公開理由や、取材相手との関係を考えてうでの限定公開の条件や非公開の理由が添えられていた⁴³⁾。コロナ禍において取材を実施しレポートを作成する作業のなかで、「調査者」となる意識と伝えることの責任が芽生えた。

教育現場においても、そこに関わる人々が、その時代や関係の当事者として意識し、他者との関係のなかで自分の立ち位置がどのように変化していくかを参与観察することから、さまざまな状況のなかでマニュアルにない授業を参加者とともに作り出していくことができる。

おわりに—経験を伝え合う

2020年度後期、甲南大学では、基本的には対面授業を実施し、受講生の多い科目や、あるいは授業内容に応じてWebを活用した授業を実施している。前期の一斉オンライン授業の取り組みは、いったい何を残し

ていったのか。いまだ非常事態が続くなかで、西川と辻野は、授業作りの試行錯誤の記録を、参与観察しながらある種のエスノグラフィーとして残しておこうと考えた。2人とも、日米の異なる場所で地域メディアの活動に携わり、毎週、ラジオ番組や動画配信番組を制作している。そこで、コロナ禍においても、阪神淡路大震災や東日本大震災など、過去の非常事態の記憶にふっとふれることがある。今の記憶と記録が未来とつながり何かを変えていくかもしれない、という思いがあった⁴⁴⁾。

一人ひとりが、厳しい現状に直面するなかでも、領域や場所をこえて経験とスキルを共有しようとする動きが起きている。大学のオンライン授業でえた経験やスキルを身近なメディアをとおして地域に伝え⁴⁵⁾、これまでは対面的な関係を大前提としてきた地域の活動が、今では、草の根のつながりと経験を活かし、オンラインで多様なイベントも開催されている⁴⁶⁾。グローバルなパンデミックは国境の壁を高くし人の往来は制限されているが、さまざまなバウンダリーを超えて学び合うことの可能性は開かれている。

謝辞

「メディア文化論」においては、ひがしなだコミュニティメディアとWRFUの協力と支援をえて、国内外の地域メディアと連携したオンライン授業を行うことができました。MEDIA ROCCO, Harukana Showのスタッフからは、アクティブな授業作りを進めていくうえで番組制作、放送、配信などのご協力をいただきました。小牧龍太氏による字幕翻訳を授業資料として利用させていただきました。オンライン公開講座の開催にあたり、塩崎祥平氏、松本章伸氏、木下朋和氏のご協力をえて、活気のあるウェビナーを実現することができました。

「発展研究F I」においては、MEDIA ROCCOのスタッフから制作プロセス、オンラインで映像制作をするためのコンテンツやスキルの共有とコメントでご協力いただきました。また調査や取材において「身近」な地域のみならずには学生に暖かく接していただきました。オンライン上映会では、学外から南出和余氏より学生への確なご指摘と暖かいコメントをいただきました。

両科目のオンライン授業の準備・実施においては、甲南大学の教育学習支援センター、共通教育センター、教務部、地域連携センター、文学部事務室、文学部社会学科、甲南学園情報システム室からのサポートをい

ただき、進めることができました。「ピアラーニングについて考える勉強会」では、大学教職員との情報交換と議論を通して授業作りの工夫や課題の共有を行うことができ、大きな刺激と学びとなっています。

心より感謝申し上げます。

注

- 1) 「My KONAN」のサーバーを増強し、また Web 授業を実施するツールとして、以前より導入されていた Office365 に加え、ビデオ会議システム「Zoom」が導入された。「特集甲南学園の新型コロナウイルス感染症対策」『KONAN TODAY』No. 58, 2020 AUTUMN, pp. 8-18, 参照。
- 2) 甲南大学文学部社会学科は、社会と関わりながら学ぶ実践を重視し、「理論」(社会を読み解く力)、「実践」(実証的な調査マインドとスキル)、「発信」(他者とのコミュニケーション)を教育の柱としている。専門科目は、1 年次配当科目を「基本科目群」、2 年次配当科目を「応用科目群」、3 年次配当科目を「発展科目群」として段階的に配置している。また、2 年次以降の応用・発展科目を 5 領域(「ライフスタイルと政策」「文化と共生」「くらしと地域」「組織とネットワーク」「メディアコミュニケーションと表現」)に分け、それぞれの領域と関連させて「発展科目 A~F」が設置されている。また、本稿において「メディア実践系科目」とは、「メディアコミュニケーションと表現」領域に含まれる科目のうち、文字、映像、音声などを組み合わせ多様な媒体を用いた作品制作を行う実習系科目やコミュニティメディアなど参加型メディアに関する講義科目をさす。西川(2018: 95-96) 参照。
- 3) 甲南大学文学部は、5 学科(日本語日本文学科、英語英米文学科、社会学科、人間科学科、歴史文化学科)からなる。
- 4) 2019年度までの「メディア文化論」の授業作りについては、松川・辻野・西川(2018: 111-120)を参照。
- 5) Microsoft Office のプレゼンテーションソフト
- 6) WRFU 会議の様子は、Harukana Show (HS) Podcast 「No. 469, March 20, 2020, 1 ヶ月のイリノイ大学留学中に、非常事態宣言 with Kotaro-san & Yoshinori-san」参照。3 月には米国における COVID-19 感染が急速に拡大し、西川は予定していた海外出張をキャンセルした。国境を越えることは難しくなったが、これまで滞米期間中のみ参加していた WRFU 会議に、定期的にオンラインで参加が可能となり、他の番組担当者と話す機会が多くなった。ラジオ局スタジオを使えないことによって、各番組の制作や放送・配信するための工程や手間が増えた。WRFU では、こうした全ての作業をボランティアが行っている。オンラインのビデオ会議への参加や番組制作に対応できないメンバーもいる。一人ひとりの状況に対してサポートが必要であれば、他のメンバー

は忍耐強く対応する。ハプニングを重ねながら、2021年1月現在も、WRFUからのラジオ番組はそれぞれに継続している。コロナ禍で新しく始まった番組も複数ある。

また、HSには、イリノイ大学の学生、教職員も出演し、COVID-19感染拡大状況や政府、大学の対策や教育のあり方などについても話題にしている。番組Podcastには、その音声と文章による記録がアーカイブとして残され、グローバルなパンデミックという状況における多地点・多音声エスノグラフィとなっている。

- 7) HS Podcast No. 476-1 では、辻野は次のように述べている。「動画番組のライブ配信には様々な方法が考えられますが、HCMの場合は、誰もがメディアにアクセスできる情報発信の仕組みを作ることを目指していますので、ライブ配信の方法を考えていく際にもそのことを念頭に置き、少ない使用機材でシンプルなセッティングでライブ配信ができるよう試行錯誤してきました。例えば2020年5月9日の第396回定期配信番組の仕組みはこうです。配信担当がPCとライブ配信機器をHDMIケーブルでつなぎ、ライブ配信機器は有線LANでインターネットに接続します。機材のセッティングとしてはこれだけです。視聴者が見るライブ配信映像には、配信担当のPCで表示される映像と音声のみが流れます」。その後も辻野は、9月と11月にHSに出演し、コロナ禍における地域メディアの活動と教育現場について話している。HS Podcast No. 495, No. 505, No. 506 参照。
- 8) 2019年9月8日に、イリノイ大学Japan House主催のMatsuriが開催された。太鼓の演奏後、公園のベンチに座り、西川がMatusmotoに1時間あまり、大きく2つのテーマについて話を聞いた。1つは、第2次世界大戦中の米国西海岸での日本人や日系アメリカ人の強制収容と、戦後、多くの日系人のシカゴへの移住と日系人コミュニティにおいての太鼓グループの生成、展開についてである。もう1つは、FSFが制作した日系人強制収容を描いた『The Orange Story』(2016)についてである。番組では、10月11日と18日に2回分けてトークを放送した。HS Podcast No. 446, No. 447 参照。
- 9) 小牧による翻訳原稿をもとに、FSFが『The Orange Story』に日本語字幕をつける予定であったが、COVID-19感染拡大によりシカゴのFSFのオフィスも閉鎖、活動が停止された。2020年9月に、Jason Matsumotoと連絡を取ることができた。3月から閉鎖したままの事務室をたたみ、今後はオンラインで活動を継続するとのことであった。
- 10) Harukana Showの番組サイトには、英語によるトークの音源とともに、内容を日本語に抄訳している。『The Orange Story』については、HS Podcast No. 447には、次のように記している。「第2次世界大戦の真珠湾攻撃の後、1942年2月19日に、ルーズベルト大統領がExecutive Order (大統領令) 9066

を発令し、約12万人の日本人、日系人が『敵性外国人』として、キャンプに強制収容されました。この映画の主人公、Kojiは、Portland (OR)で食料品店を運営していましたが、1942年4月、限られた荷物だけを持ってキャンプへ収容されます。人種差別を繰り返さないためにも、日系人とは限らず、多くのアメリカ人にこうした歴史を知ってほしい。対象を変えて人種差別は繰り返されうること、今こそ、歴史から学ぶことが必要だと思います。学校の授業でも利用しやすいように、現場の教員の意見を事前に聞いて、2時間の映画ではなく、20分未満の短編にしました。学校の先生方からは好評です。映画を観た人の意見は多様です。オープンに議論できるプラットフォームになればと考えています」。

- 11) HS Podcast, 「No. 381, July 6, 2018『映画と一緒に育てる感覚』with Hiroya-san & SKU-Team Kumas-san」
- 12) 「甲南大学×元町映画館×Harukana Show コラボイベント：社会科学部西川ゼミのメディア実践レポート」その1 (甲南Ch 2018年7月23日), その2 (甲南Ch 2018年7月24日), その3 (甲南Ch 2018年7月25日)
- 13) 元町映画館スタッフを西川に紹介したのも、甲南大学職員石野牧生氏であった。また、甲南大学文学部社会科学部の松川恭子氏が、奈良県大和郡山市を舞台とした塩崎監督の前作『茜色の約束』(2012)に、前任校のゼミでエキストラ出演などの形で協力していたことを、後日知った。
- 14) HS Podcast 「No. 480, June 5, 2020, COVID-19と映画、地域を拠点に映像制作 (1) with Shiozaki-san」参照。
- 15) 甲南Ch, 「大学での出会いからドキュメンタリー制作に至る道—社会科学部『研究法入門演習』で卒業生の話を伺う」2018年7月4日, 参照。
- 16) 松本のドキュメンタリー制作においては、視聴者のターゲット層を絞り込み、放送日が設定され、一定以上の視聴率を得なければならない。厳しい時間の制約の中で、ある程度、企画に落とし込む形で、ドキュメンタリーを撮影、制作していく。塩崎の映画作りも、「出口」を想定はするが、年単位の時間をかけて地域の人々を含めた出会いや偶然もつなぎながら企画をあたため「作品」を生み出していく。塩崎と松本の映像制作への取り組み方や「時間」に対するスタンスは対照的である。ウェビナーの後に、塩崎が「松本さんともっと話したかった」と繰り返すほどに、映像制作や作品にたいする本質的な問題を含んだ内容であった。
- 17) 塩崎と西川の対談は音源を編集し、2020年6月19日のHarukana Showでも放送した。HS Podcast 「No. 482, June 19, 2020, 地域を拠点に映像制作 (2) with Shiozaki-san」
- 18) 受講生の中には、授業期間が終わった後に、MEDIA ROCCOで実際に自分の企画を番組にした学生もいた。MEDIA ROCCO番組アーカイブ「第415回 定

- 期配信 特集1『クラシック・オーケストラについて〜ドヴォルザーク交響曲第9番新世界より〜』(2020.9.19)
- 19) 当該科目の例年の実施については、甲南大学、「甲南 Ch」を参照。「ビデオカメラを手にキャンパスから地域へ：社会学科のメディア実践系科目『発展研究 F』」2017年4月3日
- 20) MEDIA ROCCO の多地点ライブ配信移行の記録は HCM ウェブサイトで閲覧できる。「ドキュメント：MEDIA ROCCO 放送局多地点ライブ配信への歩み2020」
- 21) 例年グループ制作で実施する場合、1 グループ 4 人〜5 人で構成するので、映像作品はクラス全体で 4 本から 5 本の制作となる。2020年度は個人制作に変更したため、例年の倍の10本の映像作品が制作された。
- 22) リアルタイム遠隔授業のツールとして、甲南大学の場合 Zoom と Microsoft Teams が選択肢であったが、Zoom を主に使用していった。理由としては、既存の動画映像を視聴したり、受講生の制作途中の動画を見るなど、動画を主に扱う必要があったからである。Microsoft Teams は動画再生をすると、滑らかに動画を再生できない。一方で Zoom は動画再生がスムーズに行える。そのため実習中、上映会ともに Zoom を使用していくこととなった。
- 23) 10本の映像作品のタイトルリストは次の通りである。『水辺に寄り添った日常』『Dear My Friend』『Instagram と私たちの生活』『小さな島のクリーニング屋さん』『私のふるさと』『時とともに変わる子供の遊び』『口にする時気づかない、当たり前』『こんな時だからこそ伝えたい』『コロナ禍での自粛生活』『私たちの新たな日常』
- 24) クリッカーを使うと、授業中に簡易アンケートを実施し、リアルタイムで集計し回答状況を表示できる。
- 25) 例えば、地域団体の活動を動画で伝えることを目的とした映像制作ワークショップ「みんなで挑戦！イベント紹介ムービーづくり」を実施した。団体の活動を動画で情報発信することはハードルが高いが関心はあると考えている地域団体が多いことを知り、そのスキルの提供を目的に開催した。制作された動画は MEDIA ROCCO ウェブサイトで公開されている。
- 26) フリーの編集ソフトウェアは多くあるが、利用用途と受講生のパソコンの性能に応じ、どのソフトウェアが適しているか決める必要がある。今回の授業の場合、ソフトウェアを用いて編集し、最終的に上映できるファイル形式 mp4 にする必要があった。mp4 ファイル形式にする作業を「書き出し」と呼ぶが、この書き出し作業をしたファイルに、一部の編集ソフトウェアではそのログが透かしで入る場合があったので、採用しなかった。また編集ソフトウェアによっては動作環境が重いものもあり、それらの使用も避けた。また受講生の中には Windows を使用する者と MAC を使用する者がいたため、両方に対応している編集ソフトウェアを選定した。以上のように、当該科目の受講生の機材とインターネット環境に則した編集ソフトを選ぶ必要がある。
- 27) スマートフォンを使った撮影のヒントになればと MEDIA ROCCO スタッフが企画した番組特集を視聴した受講生が、当初オンラインでの映像制作に不安を感じていたが、工夫してできそうだと前向きな姿勢に変化していった。パワーポイントを活用した動画作成の仕方について、当該科目の元受講生が、今期の受講生たちの受講環境を知りデモ動画を作成し、提供していただいた。
- 28) 「グループ学習」機能は、文字通り、クラス内のグループワークを行うための機能である。当該機能は各大学が導入している LMS によって名称と仕様が異なっている場合がある。複数の大学での類似の機能を活用した経験から、グループ学習機能を導入すると、学生間コミュニケーションが活性化し、学びが深まることに気づき、当該授業でも取り入れた。
- 本授業では、グループワークに加えて受講生一人ひとりの制作記録としても活用した。各受講生が制作プロセスで進捗状況を発表する際に、クラスメートからのコメントが毎回書き込まれ、そのコメントが完成に至るまで一貫してそこに記録として残っていくという活用のしかたを行った。
- 29) 山地 (2014: 4) は、アクティブ・ラーニングを実質化する際のヒントとして、米国でまとめられた授業改善の指針「7つの原則」に言及している。授業をアクティブ化するには、「学生間の協働」「能動的な学習」を補完する形で「教員と学生のコンタクト」「迅速なフィードバック」の重要性を挙げている。一方で米国では TA が授業に深く関わり学生をサポートする制度があり、日本との違いを指摘している。Harukana Show でも、イリノイ大学の TA (Teaching Assistant) や RA (Research Assistant) や教育学習支援センター (Center for Innovation in Teaching & Learning) について、話題にとりあげている。HS Podcast No. 508 参照。
- 30) 村田 (2013: 182-193) は、映像制作の教育的効果として、メディア・リテラシーや制作スキルの習得だけでなく、企画能力、コミュニケーション力、多様性の認識、自己効力感、運営能力を一般的な大学教育に対する独自性として挙げている。オンラインでの映像制作実習授業においても学生の課題レポートに同様の記述が綴られている。
- 31) 辻野は、松川・辻野・西川 (2018: 120-127) において、対面授業時に実施した映像制作からの学生の学びについて論じた。そこでの学びとオンライン授業の実践を通して学生が伝える学びには重なる部分が多い。
- 32) 甲南大学は、8 学部14学科を擁し、自然、人文、社会科学の3つの分野がそろった「ミディアムサイズの総合大学」である。「学部・学科における専門の学びをもとに、分野を横断し専門が融合した学びの領域を開拓し、社会に開かれた学びを拡充してい

- く」ため、2020年度より全学教育推進機構が立ち上げられた。共通教育センター、スポーツ・健康科学教育研究センター、教育学習支援センター、リカレント教育センターの4セクターからなる。甲南大学ホームページ「全学教育推進機構」参照。
- 33) 第28回ピアラン勉強会(2020年8月4日)「オンライン授業ふりかえり(1):リレー式講義科目をライブにする」,第29回ピアラン勉強会(8月11日)「オンライン授業ふりかえり(2):メディア実践系科目」,第30回ピアラン勉強会(9月15日)「オンライン授業ふりかえり(3):社会調査関連科目」
- 34) HS Podcast「No. 505, Nov. 27, 2020, コロナ禍で地域メディアも教育現場もオンライン活用(1) with Tsujino & Mugiko」参照。
- 35) 中谷(2020: 42-43)は、オンラン授業において学生がパソコン画面から離れられない息苦しさを解消する1つの方法として、「ラジオ方式」(オンデマンドのポッドキャスト)を授業に取り入れた。受講生は、教科書を見ながらも、料理をしながらでも、寝ながらでも、自由にポッドキャストを聞くことができる。「オンライン授業の息苦しさは、画面の中の教員の振る舞いに付き合わねばならない義務感にある」(p. 43)とし、聞き役のパersoナリティ兼ミキシング担当者の学生TA(ティーチング・アシスタント)とともに、「ラジオ建築史」なる試みを行った。
- 36) メディア文化論のウェビナーに参加したある学生の感想の一部である。「塩崎祥平さんと松本章伸さんが熱く語っていたのが聞いていて面白かったです。詳しいことが分からなく、どういう風に質問をしていいかわからないかゆいところを、自分たちの代わりに松本章伸さんが代弁してくれたようで有意義なトークであったと思います」。「ピアラン勉強会」においても、複数教員によるビデオ会議による座談会を動画に収録した授業事例が紹介されていた。オンラインのビデオ会議の動画では、画面上に3、4人の出演者の表情がよく見え、広い講義室では教壇にスピーカー全員の動きが見えるのとは異なる面白さがある。
- 37) 第29回ピアラン勉強会「オンライン授業ふりかえり(2):メディア実践系科目」記録
- 38) 授業参加者のあいだのコミュニケーションは、授業形態にかかわらず重要である。ただし、一人の教員は、異なる種類の複数の科目を担当しており、それぞれの授業に費やすことができる時間は限られている。毎週、授業と受講生の数だけ課題を受け取る。学生向けポータルサイトを通して授業に関する問い合わせが、時間帯と関係なく、頻繁に届く。実習系の授業をオンラインのみで実施する場合、対面授業とは異なる工夫と、相当な時間を要する。複数の大学で多くの科目を担当する非常勤講師の場合は、大学によって異なるコロナ対策と授業方針に対応し、また機能が異なるLMSを使いこなしていくなど、負担はさらに大きくなっている。ケイン(2020)は、非常勤講師の「コロナ禍のオンライン講義とやりがい搾取」の問題を論じている。非常勤講師の不安定な立場、コロナ禍でのとめどない不安と時間外労働、研究費も授業準備費も支給されないなかでの新しい授業形態への対応、労災、賃金補償の問題なども、パンデミック以前から生じていた問題の延長線上にあるが、「コロナ禍以前から／以後から非常勤講師が直面する諸問題は自己責任化されつつある」(p. 27)と指摘している。
- 39) アルバイト先の店長や来客者と話し、町内会の役職者やスポーツチームの監督に会いに行くなど、それぞれが身近な暮らしや記憶と向き合おうとする調査計画ではあった。LMSに提出された調査計画の課題を一覧表に一括してダウンロードして受講生各自を行に毎回の提出内容を列として加えていくと巨大な一覧表ができる。そこに、気になる部分を色付けすると、ある回から安全への意識が希薄になる集団としての変化が色として可視化される。Learning Management Systemが、一般的には、学習「管理」システムと呼ばれる所以でもあろう。
- 40) 井本由紀(2013: 104)は、オートエスノグラフィーの特徴を次のように述べている。「オートエスノグラフィーとは、調査者が自分自身を研究対象とし、自分の主観的な経験を表現しながら、それを自己再帰的に考察する手法だ。内部の視点から文化について考察を行うという意味で、ネイティヴ・エスノグラフィーや当事者研究と重なる部分もある。ただしオートエスノグラフィーは、自己の置かれている立場を振り返る再帰的な行為だけでなく、自分の感情をふり返り、呼び起こす、内省的な行為でもある」。
- 41) 授業課題は、他の受講生も読むという前提で、プライバシーには配慮して提出するように伝えている。また授業資料として掲載する際は、内容を編集してオリジナルとは異なる形にする場合もある。
- 42) 例年の「フィールドワーク研究」では、調査報告書として「フィールドワーク ZINE」を制作・展示し、参加者が講評しあう「ZINE 大会」を教室で開催してきた(西川 2019, 2020)。2020年度は調査開始時期が遅れ、レポート提出期間を授業期間後のテスト期間に設定したため、オンライン上での作品講評会を実施しなかった。
- 43) 「コロナ禍における貴重な記録となった。レポートの名前を匿名としており、教育目的で利用してもらってかまわない」「子供たちの様子をリアルに伝える聞き書きとなったため、利用不可」「授業課題のためと特別に取材に応じてもらった、公開は控える」など。
- 44) 2020年12月5日放送のHarukana Showに出演した辻野は、「震災の経験がその後の人々の行動に結びついていったように、今のオンラインの経験と記憶は、これからの人々の行動に何かしらの変化を与えていくのかもしれませんが」と述べ、番組ホストの小牧が次のようにコメントしている。「急遽オンライ

ンに移行して行われた授業では、教員も学生も、大学職員の方々も、試行錯誤の連続だったと思います。それらを通して技術的、内容的に変わったこと、新たに得られたことの中には長く役に立つものも含まれていそうだと思います。そのようなものを（特殊な一年/数年だった、で終わらせて忘れ去ってしまうのではなく）残し、さらに、自分だけの、大学だけのものとして留めておくのではなく、広く共有していくことで、社会もまた少し、『レジリエント』なものになるのかもしれないですね（HS Podcast No. 506, Dec. 5, 2020）。

- 45) MEDIA ROCCO, 「第407回定期配信特集『ZOOMをはじめてみよう！』2020.7.25」「第422回定期配信特集『ZOOMをはじめてみよう！第2弾』2020.11.7」
- 46) HS Podcast, No. 502, Nov. 6, 2020, 「コロナ禍のライブ活動、分業と協働のローカル配信へのこだわり with リクオ」

参考文献・資料

参考文献

井本由紀

- ・2013「オートエスノグラフィー 調査者が自己を調査する」藤田結子、北村文編『現代エスノグラフィー—新しいフィールドワークの理論と実践』新曜社, pp. 104-111

ケイン樹里安

- ・2020「コロナ禍のオンライン講義と非常勤講師のやりがい搾取」『都市問題』2020年12月号, pp. 20-29

甲南学園広報部編, 発行

- ・2020『KONAN TODAY』No. 58, 2020 Autumn

佐藤浩章

- ・2020, 「ポスト・コロナ時代の大学教員とFD：コロナが加速させたその変容」『現代思想：特集コロナ時代の大学』10月号, vol. 48-14, pp. 75-84

中谷礼仁

- ・2020「教室をわすれた先生は」『建築雑誌』2020年11月号, 第135集・第1743号, 日本建築学会, pp. 42-43

西川麦子

- ・2012「コミュニティラジオをグローバルに開く：アメリカ, イリノイ州, WRFU-LP の日本語番組の試み」『甲南大学紀要文学編』No. 162, pp. 51-68
- ・2013a「多文化接触のメディア空間—米国のコミュニティラジオから」『世界思想』40号, 2013年春, pp. 18-21
- ・2013b「運動としてのコミュニティ・メディア：アメリカ, イリノイ州, WRFU-LP とグローバルなネットワーク」『甲南大学紀要文学編』No. 162, pp. 133-152
- ・2014a「地域の多様性をつなぐメディア実践：アメリカ, イリノイ州, アーバナ・シャンペーンのメディア表現者たち」『甲南大学紀要文学編』No. 164, pp. 113-132
- ・2014b「コミュニケーションツールとしてのラジオ」『建築雑誌』Vol. 129, No. 1665, pp. 30-31

- ・2016「アクションリサーチ法」工藤保則, 寺岡伸悟, 宮垣元編『質的調査の方法—都市・文化・メディアの感じ方』第2版, 法律文化社, pp. 144-155
- ・2017「現代のコミュニケーション・ツールとしてのZINE：顔が見える他者を引き寄せるメディア」『甲南大学紀要文学編』No. 167, pp. 51-66
- ・2018「『メディア実践系』授業の作り方（総論）：甲南大学文学部社会学科の取り組み」『甲南大学紀要文学編』No. 168, pp. 95-104
- ・2019「『参加型メディア』Zineを取り入れたフィールドワークの授業：他者に伝え学び合う」『甲南大学紀要文学編』No. 169, pp. 63-77
- ・2020「イリノイ大学における教育活動とZine：主体的に学び社会と関わる」『甲南大学紀要文学編』No. 170, pp. 89-109

松川恭子・辻野理花・西川麦子

- ・2018, 「『メディア実践系』授業の作り方（実践編）：他者から学び、伝える方法」『甲南大学紀要文学編』No. 168, pp. 105-132

松本章伸

- ・2017a「学生 Storyteller の挑戦：神戸を舞台にした観光PR映像制作の実践と考察」『龍谷大学社会学部紀要』第51号, pp. 10-20
- ・2017b「映像を用いたメディア・リテラシーの教材開発と実践：『報道被害』を事例とした教育実践の考察」『政治情報学会誌』11 (1), pp. 15-31
- ・2020「米国 VICE Media の表現形式にみる共生」笠井賢紀・工藤保則編『共生の思想と作法：共によりよく生き続けるために』法律文化社, pp. 200-215

村田雅之

- ・2013「映像制作を通して学ぶ—新しい教育デザインの可能性」松野良一・塚本美恵子・間島貞幸・五嶋正治・村田雅之『映像制作で人間力を育てる—メディアリテラシーを超えて』田研出版, pp. 165-209

山地弘起

- ・2014「アクティブ・ラーニングとはなにか（特集アクティブ・ラーニングの実質化に向けて）」『大学教育と情報』(1), pp. 2-7

映像作品

塩崎祥平監督／脚本

- ・2012『茜色の約束 サンバ do 金魚』百米映画社
- ・2019『かぞくわり』かぞくわり LLP

Street, Erika

- ・2016, *The Orange Story*, FULL SPECTRUM FEATURES

URL

- ・FULL SPECTRUM FEATURES: <https://www.fullspectrumfeatures.com/>
- ・Grassroots Media Zine: <http://grassrootsmediazine.org/>
- ・Harukana Show: <http://harukanashow.org/>
- ・Harukana Show Podcast: <http://harukanashow.org/archives/category/harukana-show-podcast>

- 「No. 379, June 22, 2018 神戸のミニシアター, 元町映画館 with Hiroya-san」
 - 「No. 381, July 6, 2018『映画を一緒に育てる感覚』with Hiroya-san & SKU-Team Kuma-san」
 - 「No. 446, October 11, 2019, 伝統を多様性に関く Ho Etsu Taiko (法悦太鼓) with Jason Matsumoto」
 - 「No. 447, October 18, 2019, Historical Fiction Film, The Orange Story, 歴史を伝える, 議論を開くプラットフォーム作り with Jason Matsumoto」
 - 「No. 459, Jan. 10, 2020, 『日本のアニメ, マンガ大好き』『健康地理学って?』GIS シリーズ No. 3-1 with Jeon-Young & M. Wataru」
 - 「No. 460, Jan. 17, 2020, Agent-Based Model で感染症伝搬の時空間シミュレーション, GIS シリーズ No. 3-2 with Jeon-Young and M. Wataru」
 - 「No. 465, Feb. 21, 2020, 『ランドスケープ・アーキテクチャーを本場で学ぶ』GIS シリーズ No. 4-1, with Yuta & Wataru」
 - 「No. 466, Feb. 28, 2020, 『防災から減災へ, レジリエンス, しなやかな回復力』GIS シリーズ No. 4-2, with Yuta & Wataru」
 - 「No. 469, March 20, 2020, 1ヶ月のイリノイ大学留学中に, 非常事態宣言 with Kotaro-san & Yoshinori-san」
 - 「No. 470, March 27, 2020『COVID-19』対応, U-Cでもマスク使用は増えたが…with Jeon-Young & Wataru」
 - 「No. 472, April 10, 2020, 『UIUC JPN Community COVID-19 Town Hall』with Tatsuya-san, 『地元に戻ってからの夢』(後半) with H. Wataru と仲間たち(後半)」
 - 「No. 474-1, April 24, 2020, 『リスク・コミュニケーション』with Tatsuya-san」
 - 「No. 474-2, April 24, 2020, AWAJI 藍 LAND project (1), 『藍の育て方』with Negi-san」
 - 「No. 475-1, May 1, 2020, Stay at Home Order, IL 州は5月末まで延長 with Tatsuya」
 - 「No. 475-2, May 1, 2020, AWAJI 藍 LAND project (2) 東日本大震災をきっかけに淡路島へ移住 with Negi-san」
 - 「No. 476-1, May 8, 2020, COVID-19 と MEDIA ROCCO, HCM (1), 誰でもが参加できる多地点ライブ配信へ with Tsujino」
 - 「No. 476-2, May 8, 2020, COVID-19 のイリノイ大学への影響 with Tatsuya」
 - 「No. 477-1, May 15, COVID-19 と移民問題 with Tom」
 - 「No. 477-2, May 15, 2020, COVID-19 と MEDIA ROCCO, HCM (2) 視聴者との双方向性への変化 with Tsujino」
 - 「No. 478, May 22, 2020, GIS シリーズ No 5-1, COVID-19 とレジリエンス, 公園の可能性 with Yuta & M. Wataru」
 - 「No. 479, May 20, 2020, GIS シリーズ No. 5-2, COVID-19 とレジリエンス, モビリティ with Yuta & M. Wataru」
 - 「No. 480, June 5, 2020, COVID-19 と映画, 地域を拠点に映像制作 (1) with Shiozaki-san」
 - 「No. 482, June 19, 2020, 地域を拠点に映像制作 (2) with Shiozaki-san」
 - 「No. 483, June 26, 2020, GIS シリーズ No. 6-1, 『都道府県別新型コロナウイルス感染者マップ』GIS との出会い with Ai-san」
 - 「No. 484, July 3, 2020, GIS シリーズ No. 6-2, 『都道府県別新型コロナウイルス感染者マップ』開発秘話 with Ai-san」
 - 「No. 489-1, August 7, 2020, Indy 500 も無観客レース, UIUC キャンパス内に COVID-19 の検査所」
 - 「No. 489-2, August 7, 2020, 女子会トーク2020 (前半) コロナ渦中での帰国, 小学校も大混乱 with Sayaka & Kyoko」
 - 「No. 490, August 14, 2020, 女子会トーク2020 (後半), 『おうち時間』と『鬼滅の刃』, 学童保育, コロナ禍の国籍の壁 with Kyoto & Sayaka」
 - 「No. 494, Sept. 11, 2020, コロナ禍の日々の暮らし, マイバック, 地域の図書館」
 - 「No. 495, Sept. 18, 2020, コロナ禍のコミュニティ活動のつながり with Tsujino」
 - 「No. 496, Sept. 25, 2020, 半年間の IL 州, U-C, イリノイ大学の感染拡大概要 With Tatsuya」
 - 「No. 497, Oct. 2, 2020, イリノイ大学のコロナ対応策と地域との連携 with Tatsuya-san」
 - 「No. 498, Oct. 9, 2020, ドライブスルーで Flu Shot, COVID-19 と図書館」
 - 「No. 499, Oct. 16, 2020, 偶然の出会いが恋しい, 地図をオンラインで楽しむ with M. Wataru」
 - 「No. 501, Oct. 30, 2020, Public Library で映画『生きる』に再会, 公共図書館の新しい役割 with M. Wataru & Ryuta」
 - 「No. 502, Nov. 6, 2020, コロナ禍のライブ活動, 分業と協働のローカル配信へのこだわり with リクオ」
 - 「No. 503, Nov. 13, 2020, コロナ禍での UIUC の授業作り, 研究, 暮らし with Koji」
 - 「No. 505, Nov. 27, 2020, コロナ禍で地域メディアも教育現場もオンライン活用 (1) with Tsujino & Mugiko」
 - 「No. 506, Dec. 4, 2020, コロナ禍で地域メディアも教育現場もオンライン活用 (2) with Tsujino & Mugiko」
 - 「No. 508, Dec. 18, 2020, オンライン学習環境と授業作りの工夫 with M. Wataru」
 - 「No. 509, Dec. 25, 2020, IL 州の COVID-19 感染状況と対策, ワクチン接種の今後 with Tatsuya」
- 甲南 Ch
- 「ビデオカメラを手にキャンパスから地域へ: 社会学科のメディア実践系科目『発展研究 F』』2017年4月3日: <https://ch.konan-u.ac.jp/information/information/category-11/540.html>
 - 「アメリカに届ける “KIKOEMASUKA? (聞こえますか?)” ——文学部社会学科『メディア文化論』での地域メディアとの連携の試み」(その1) 2018年1月

24日：<https://ch.konan-u.ac.jp/information/information/category-11/771.html>

- ・「甲南大学×元町映画館×Harukana Show コラボイベント：社会学科西川ゼミのメディア実践レポート」(その1) 2018年7月23日：<https://ch.konan-u.ac.jp/information/information/category-11/860.html>, (その2) 2018年7月24日：<https://ch.konan-u.ac.jp/information/information/category-11/861.html>, (その3) 2018年7月25日：<https://ch.konan-u.ac.jp/information/information/category-11/862.html>
 - ・「『メディアをつくるプロセス』が生み出すものについて考える——文学部社会学科『メディア文化論』での地域メディアとの連携の試み」(その2) 2019年4月5日：<https://ch.konan-u.ac.jp/information/information/category-11/1034.html>
 - ・「『現場』が教えてくれたこと—社会学科学生のNHK大阪放送局での実習報告—」2019年6月10日：<https://ch.konan-u.ac.jp/information/information/category-11/1051.html>
 - ・「映画監督塩崎祥平氏を招いたWebinar 企画—『メディア文化論』でライブに学ぶコミュニティメディア」(その1) 2020年7月30日：<https://ch.konan-u.ac.jp/information/information/category-11/1315.html>
 - ・「たくさんの言葉が響き合うオンライン授業—『メディア文化論』でライブに学ぶコミュニティメディア」(その2) 2020年8月3日：<https://ch.konan-u.ac.jp/information/information/category-11/1323.html>
- 甲南大学「全学教育推進機構」：<http://www.konan-u.ac.jp/education/celas/>

MEDIA ROCCO ウェブサイト：<http://mediarocco.jp>

- ・「ドキュメント：MEDIA ROCCO 放送局多地点ライブ配信への歩み2020」：<https://mediarocco.jp/?p=3733>
- ・「みんなで挑戦！イベント紹介ムービーづくり」<https://mediarocco.jp/?p=3659> 制作動画は次のURLにて公開された。<https://vimeo.com/379410087>, <https://vimeo.com/393096211>, <https://vimeo.com/393096647>

MEDIA ROCCO アーカイブス on Vimeo:

<https://vimeo.com/mediarocco>

- ・「第399回定期配信 1/2 特集1 はじめてみよう！クリエイションシリーズ『おうちでTRY！カメラワーク』」(2020.5.30)
- ・「第380回 MEDIA ROCCO 定期配信『ほっとタイムこうべ』地域情報コーナー：甲南大学ボランティアサークル『パラフル』×東灘こどもカフェ『甲南大生とパフェ作り！』」(2020.1.18)
- ・「第387回定期配信 1/2 特集1 『働くってなに？』」(2020.3.7)
- ・「第389回定期配信 1/2 特集1 『たぶんかこどものけんこうえほん』」(2020.3.21)
- ・「第393回定期配信 1/2 特集1 『新型コロナウイルス対策5つの提言』」(2020.4.18)
- ・「第393回定期配信 2/2 特集2 『多地点ライブ配信挑戦記！2020』」(2020.4.18)
- ・「第394回定期配信特集『新型コロナ世界事情～今世界はどうなってる？』」(2020.4.25)
- ・「第402回定期配信特集『はじめてみよう！クリエイションシリーズ：動画の作り方実践編』」(2020.6.20)
- ・「第396回定期配信特集『コロナウイルスとは何者か？』」(2020.5.9)
- ・「第397回定期配信特集『コロナウイルスとは何者か？第2弾』」(2020.5.16)
- ・「第398回定期配信『ほっとタイムこうべ』特集『コロナウイルスとは何者か？第3弾』」(2020.5.23)
- ・「第407回定期配信特集『ZOOMをはじめてみよう！』」(2020.7.25)
- ・「第422回定期配信特集『ZOOMをはじめてみよう！第2弾』」(2020.11.7)
- ・Media Rocco: https://mediarocco.jp/?page_id=20
Urbana Campaign Independent Media Center: <http://www.ucimc.org>
WRFU-LP104.5FM: <http://www.wrfu.net>

*URL 最終アクセス2021年1月5日